

# 太 玄

会報 第75号

令和元年8月

太 玄 会



一、あいさつ		四、令和元年度総会	
垣内 楊 石 会 長	1	a 資料掲載	34
露野 雅 宣 理 事 長	2	b 総会・懇親会風景	44
金丸 鬼 山 事 務 局 長	3	五、創立60周年記念祝賀会	
二、平成30年度総会		a 祝賀会風景	45
a 資料掲載	4	b ご来賓一覧	46
b 総会・懇親会風景	13	c 祝辞・謝辞	47
三、第60回記念太玄会書展		六、太玄会所属団体のこの一年の活動	50
日程表	14	(平成29年10月～平成30年9月)	
役員及び各部部长	14	七、太玄会所属団体の活動予定	58
入賞・入選者	15	八、特 集	
会場・審査風景	18	高山 爽 快	59
授賞式・祝賀会	19	清水 美 代 子	61
作品解説・席上揮毫	20	須 田 瑞 兆	62
特別講演	21	大 森 鳳 城	63
謝 辞	33	編集後記 広報部	





## 第六十回記念太玄会書展所感

会長 垣内 楊石

第六十回記念太玄会書展は無事、成功裡に終了しましたことは会員各位のご協力の賜と深く感謝いたしております。この太玄

会が創立されたのは昭和三十四年で、初回の書展は翌三十五年三月でありました。戦後の日本の書道振興と発展のための一角を荷う書道会の結成を意図し、太玄会と組織されたのは、当時の日本書壇の重鎮鈴木翠軒氏でありました。会長は平尾孤往、副会長赤羽雲庭、理事長吉田雲芳、顧問鈴木翠軒という錚々たるメンバーでした。しかし二年後の昭和三十七年に思わぬ事から四人の完全員が退会されてしまいました。設立間もないことで会の存亡に関わる事態を乗りきるためにと、事務局長であった阿部鉄蕉氏が会長の名代としてその処理に当たられ、運営の責務を執られたのでありました。この数年の間、会員の離合集散が多く、心配も絶えませんでした。阿部事務局長の手腕、力量と努力によって安定した太玄会を築かれたのであります。まさに阿部鉄蕉氏は今日の太玄会の礎を築かれた功労者と言えます。

その後、後継の会長、役員のご努力により、充実発展をみたことは言うまでもありません。

今回の記念展で特筆したいことは、高橋利郎先生による特別講演、また役員諸氏による作品解説、席上揮毫等であります。聴衆、観衆に与えた感銘は深いものがあつたと思っております。この六十回記念の数字は年令の還暦に相当する大きな節目であり、新たな未来を志向する期でもあります。到来する少子高齢化による書道人の減少の問題は深刻であります。このことは日本の書道界全体として取り組むべき問題と考えます。なお気になるのは書道展に一般観客が見られないということがあります。日本古来の特有の芸術・文化である書道が、書道人だけの占有舞台として盛況を極めるも、一般大衆と疎遠になったのでは残念であります。こうした問題も未来志向以前の私たちにその解決、方策を与えられている問題として取り組まねばならないでしょう。



## 第六十回記念太玄会書展を終えて

理事長 路野雅宣

第六十回記念太玄会書展、お陰様で盛会裏、無事終了することが出来ました。これも偏に太玄会に籍を置く先生方、そして皆様のご尽力、ご協力の賜物と厚く御礼を申し上げます。会期中は天候に恵まれ、大勢の皆様にご高覧頂きました。

六十年の歴史を踏まえ、それにふさわしい企画と思考する中、会場での特別展示では大東文化大学教授高橋利郎先生の絶大なご支援のもと、成田山書道美術館より二十一点の作品をお借りすることが出来ました。講堂にて「幕末文人趣味から現代の書へ」、知識や学書研鑽の意を高めるご講演も頂きました。書作ビデオ（先の撮影分と新規の合併版DVD）の放映、作品解説、席上揮毫。太玄会ならではの「広さ」を見、聞き、伝えることが出来たと思っています。

改めて思うことに太玄会十五団体、過去の歴史の上での成り立ちではありますが、その特徴をより充実させて行く方策、一つのワクを越えた会員相互の学習、研鑽の機会を設けて、個人の人更なる活躍へ、それを会に反映、活力に昇華して行けたら。：。そんな夢も画いて行きたいものです。

学生展は三回目となりました。優秀な作品を多く目にしました。その中の高校生、発表の形を考える時機かとも思います。六月九日（日）は太玄会創立六十周年記念祝賀会です。書道界の先生方が大勢でご参加下さいます。会員の皆様何かとご協力の程、お願い申し上げます。



## 平成30年度事業を終えて

事務局長 金丸 鬼山

平成三十年度の事業計画に基づき、適時会議が開かれ、第六十回記念太玄会書展の開催運営は無論の事、創立六十周年記念祝賀会の準備に係る実行委員会の設立、等が討議され委員長に笠原聖雲常任顧問を擁し、夫々の人事も決まり準備が進められて居ます。

第六十回記念太玄会書展に於いて学生選抜展併催も定着し第三回を迎えました。選抜数も四〇〇点となり、学生とその家族の来館の増えた事は大変喜ばしい事でした。扱って第六十回記念展から高い壁面の都美術館の展示効果を上げる為、会員以上の作品に縦十尺サイズを規定に盛り込み第一室の役員の先生には寸法指定で出展のお願いをしました。その結果展示場が大きく感じましたが、更に効果的な作品展示の検討が必要と思いました。

会期中のイベント、恒例と成りました作品解説、席上揮毫も副理事長の立案運営に寄り、毎回盛況にて実施されました。更に今回記念展特別講演会は成田山書道美術学芸員・大東文化大

学教授、高橋利郎先生による【幕末文人趣味から現代の書へ】と題し講演を頂きました。講演最後には高橋利郎先生執筆の豪華本が聴講者にジャンケンによる進呈が有り大いに盛り上がりました。尚これに伴う二十一点の物故者の名品を会場に展示して頂き、会員並び来館者に眼福を与えて下さいました。

更に今展は第一室に役員十三名の揮毫ビデオ放映を行い、会員はもとより来館者に変興味を与えました。此のビデオ撮影に当たっては伊場英白先生と宮原真玄先生が各先生宅を訪問し撮影された賜物です。

この様に役員並びに事務局、部長会、会員の協力により第六十回記念太玄展は無事終了する事が出来ました。心からお礼申し上げます。

創立六十周年記念祝賀会の準備が進められて居ます。皆様に一層のご協力をお願いし、今年度の報告と致します。

# 平成30年度 総会

日時 平成30年4月15日(日) 16時開始  
会場 上野精養軒 (司会・伊場英白)

## 次第

- 一 定足数の確認 (伊場英白) 出席80名 (委任状575名)
- 一 開会の辞 (金丸鬼山)
- 一 常任顧問挨拶 (田中鳳柳)
- 一 会長挨拶 (垣内楊石)
- 一 議長選出 (笠原聖雲)
- 一 書記任命 (山村鳳羽・三根揚輝)
- 一 議 事
  - (1) 平成29年度 事業報告 (金丸鬼山)
  - (2) 平成29年度 決算報告、会計監査報告 (下谷蘊雪・高橋心行)
  - (3) 平成30年度 事業計画案について (金丸鬼山)
  - (4) 平成30年度 予算案について (下谷蘊雪)
  - (5) 新役員の紹介(理事・実行委員 理事) (笠原聖雲)
  - (6) その他
- 一 書記退任
- 一 議長退任
- 一 閉会の辞 (宮負丁香)

# 平成29年度 事業報告書

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
29・4・16	運営委員会 運営委員会・理事会 平成29年定期総会 懇親会	役員改選 事業報告・会計決算報告 事業計画案・予算案審議 役員承認・その他	上野精養軒
5・10	運営委員会	第59回太玄会書展関係 その他 (第2回学生選抜展・特別講演会) 第60回記念太玄会書展関係 (60周年記念祝賀会等)	上野精養軒
6・14	検討委員会 事務局、部長合同会議	第59回太玄会書展 (併催第2回学生選抜展関係) その他	上野精養軒
7・12	運営委員会	第59回太玄会書展関係 その他 (第2回学生選抜展・特別講演会)	上野精養軒
10・4	検討委員会 事務局、部長合同会議	第59回太玄会書展 (併催第2回学生選抜展関係) 各部進捗状況報告 企画詳細の確認	上野精養軒
12・3	運営委員会 理事会	書類搬入 第59回太玄会書展 (併催第2回学生選抜展関係) 忘年懇親会	上野精養軒
30・1・8	第59回太玄会書展 (併催第2回学生選抜展) 1/20・1/26 1/10・1/17・1/26 9・30・17・30 一般出品数 923点 学生出品数 388点 総出品数 1321点 (第58回展 107点)	審査(会員賞選考) 審査(準会員・公募) 高木厚人先生による特別講演会 席上揮毫・解説会	東京都美術館
1・21	第59回太玄会書展 (併催第2回学生選抜展) 事務局、部長会議	授賞式・祝賀会	上野精養軒
3・17	事務局、部長会議 (併催第2回学生選抜展) 反省会	第59回太玄会書展 (併催第2回学生選抜展) 第60回記念展に向けて 事務局編成について	上野精養軒
4・4	会計監査	東武ホテルイベント東京	
4・15	運営委員会・理事会 平成30年度定期総会	事業報告・決算報告 事業計画案・予算案審議 その他 懇親会	上野精養軒

## 第59回太玄会書展(併催第2回学生選抜展)出品状況

☆総出品点数 1,321点

22	名誉顧問 常任顧問 董事 運営委員
9	理事 事務 委員
56	実理事 行理事
109	理事
142	審査員
104	会員
213	準会員
268	公募
398	学生

## 第59回太玄会書展入賞状況

4	太玄大賞
5	太玄賞
5	全日本書道連盟賞
5	特別賞
6	奨励賞
8	会員新人賞
33	推選
54	準推選
39	特選
67	準特選
162	入選
398	学生部入選

※入場者数 5,341名

## 事務局各部活動状況報告

### ◎事務局

(担当) 副事務局長 伊東玲翠 江原見山 伊場英白 小出聖州

4 定期総会実施

6 平成29年度会員名簿発行

7 第59回太玄会書展実施に向けての打ち合わせ

10 60周年記念事業について検討

運営委員会、理事会、忘年懇親会への通知

11 牧野商会、美風会への第59回太玄会書展の依頼

本展会場打合せ 当番総括 総会会場打ち合わせ

30 1 第59回太玄会書展開催 高木厚人先生に依る講演会実施

2 平成30年度定期総会のお知らせ

3 第59回展来場者(各会来賓、その他) 礼状及び図録送付

※年間に開催される運営委員会、理事会、部長会、総会等会議の連絡事務

※報道関係(本展作品)(年鑑、広告)掲載に関する業務

※住所変更、退会届等受付処理業務

※東京都美術館平成29年度公募団体展展示室の借館

(平成29年4月～平成34年3月)の5年間太玄会32会期

1月19日～1月26日

### ◎会計部 (担当) 下谷穂雪

29 4 平成28年度の会計監査に向けて仕訳帳等の整理準備

総会に向けて平成28年度の決算書、並びに平成29年度の予算

案作成

平成28年度会計監査実施

平成29年度総会 決算書、予算案報告、総会受付補助

各社中へ平成29年度会費納入に関する書類並びに依頼書を送付

6 平成29年度納入会費の整理入力、領収書作成依頼

7 会費領収書を各社中へ送付

10 第59回太玄会書展に關して各部の行動予定の把握 行動費、経費の算出、資金の準備

第59回太玄会書展書類搬入時の準備

12 第59回太玄会書展の予算案作成、運営委員会に提示

平成29年度理事会忘年会 会費納入受付 公募出品料集計確認

第59回太玄会書展必要経費準備

30 1 第59回太玄会書展審査会に於ける手当及び経費支払業務

第59回太玄会書展授賞式、授賞懇親会の諸経費準備、支払業務

2 第59回太玄会書展の収支報告書作成

3 平成29年度会計監査に向けて元帳、仕訳帳の入力整理

平成29年度決算書、平成30年度予算案作成

### ◎事業部 (担当 落野祐涯)

29 5 アオキに会員名札を発注

6 風雅プランニングへ、垣内楊石会長揮毫の太玄会賞状原稿及び、出品規定・出品票(公募用の資料)を送付。搬入部署部長及び、学生部部长印作成

長及び、学生部部长印作成

7 風雅プランニングとの打ち合わせ、ポスター・ハガキなど全

書類送付

8 校正(ポスター・ハガキ・出品規定等)

出品規定・出品票入荷

真仙会・九龍社・鳥跡会三社中の会員名札、及び役職札、事

務用品の確認と整理

9 出品規定・出品票を各社中準会員以上へ個人宛に発送

10 風雅プランニングから各社中・各業者へポスターなど書類発送

11 杉本先生に賞状を郵送

30 1 東京都美術館に備品搬入、各社中の役職札の手配

備品の整理

賞札の整理及び賞状・褒賞部依頼品を精養軒へ搬入

年間を通じて封筒は各先生の依頼により郵送

### ◎広報部 (担当 荒井湧山)

29 4 定期総会

9 原稿依頼

部長会にて会報第74号の構成計画を報告 於…上野精養軒

9～11 会報第74号の編集

原稿依頼

(会長) 垣内楊石先生(理事長) 落野雅宣先生

(事務局長) 金丸鬼山先生

(特集) 石坂翔鳳先生、近藤寿仙先生、長谷川溪華先生、

長谷川香濤先生、

各団体事務局担当(所属団体この一年の活動) 編集作業

29 12 理事会・忘年会 於…上野精養軒

30 1 第59回太玄会書展(審査、会場風景、講演、授賞式、祝賀会)

写真撮影 於…東京都美術館

会報の編集作業、原稿を風雅プランニングに依頼

2 会報の校正

3 会報第74号発行、各社中へ発送

◎渉外接待部（担当 石井蕙園）

29 11 第59回太玄会書展 祝賀会招待状の文面確認し風雅プランニングに印刷依頼

12 住所シール作成案内状発送、祝賀会招待状の発送

30 1 祝賀会出欠の最終確認をとり席次表、席札、もぎりの作成

席次表、席札の設置を精養軒に依頼

祝賀会来賓者の受付

特別講演会の受付（東京都美術館講堂 1/25）

◎図録部（担当 伊藤慈恩）

第59回太玄会書展作品集

29 10 図録に係る基本方針の作成

30 1 作品撮影 44点 風雅プランニング

（審査会員以上<sup>338</sup>、会員受賞者19、準会員受賞者87）

編集 風雅プランニング

2 一回目、二回目の校正

発行部数と発送先の確認

図録発行

各社中事務担当者宛発送 風雅プランニング（2/28）

◎搬入出部（担当 山口香葉）

29 10 書類搬入案内書を社中事務担当者に発送

（会計部より受領の払込取扱票同封）

招集通知書を搬入出部に発送

（書類搬入日・作品搬入日の事務作業の説明書）

12 書類搬入日 事務の実施

書類搬入の受付

社中持参の出品目録等の書類集約

社中別出品者数表の全体表作成

出品者数を理事会にて報告

受付書類を担当部長に引き継ぐ

30 1 作品搬入日 事務の実施

作品搬入の受付

搬入数の確認・確定（表装店8社より持ち込み）

役職別・社中別数の確認（社中別出品者数表参照）

資格別作品出品数一覧表・出品目録・社中別出品者数表の確定

事務局長に報告後、審査事務部長に引き継ぐ

作品搬出日 立会の実施

作品搬出の受付

搬出数の確認・立会（表装店8社の引き取り）

◎審査事務部（担当 山村風羽）

29 12 ・第59回太玄会書展の書類搬入確認（12/3）

30 1

- ・審査事務部処理について打ち合わせ
- ・第59回太玄会書展審査事務部打ち合わせ、役割分担説明（1／8）
- ・審査手順、作品配置について打ち合わせ
- ・作品 923点確認 ・審査場作成
- ・作品配置 ・成績処理の打ち合わせ
- ・出品者目録校正
- ・審査方法打ち合わせ、役割分担確認（1／9）
- ・風雅プランニングと打ち合わせ
- ・会員賞選考委員による審査1／9）
- ・会員新人賞の選考審査
- ・特別賞、奨励賞の選考審査
- ・太玄賞、全日本書道連盟賞の選考審査
- ・太玄大賞の選考審査
- ・入賞者代表謝辞選出
- ・選考委員集合写真撮影
- ・選考委員及び当番審査員による審査（1／10）
- ・推選、準推選、特選、準特選、入選の選考審査
- ・選考委員及び当番審査員集合写真撮影
- ・作品管理、成績名簿作成 ・褒賞部へ連絡

◎陳列部（担当 大場大幹）

29 10 各社中に陳列人員名簿の依頼書類を送付

12 搬入部より社中別出品者名簿と準会員、公募の名札を受け

取り出品数の確認

牧野商会に出品点数（一般923点、学生部398点）を連絡し見積りを依頼

陳列原案を作成

副部長、委員に書類を送付

30 1 搬入日 牧野商會担当者と打ち合わせ 準会員、公募作品と

名札の確認

陳列日 総人数約65名、15時半終了

初日 9時より副部長と名札、賞状等の再確認

最終日 14時半終了、名札等の取り外しと整理

◎褒賞部（担当 小泉興起）

29 12 精養軒担当者との打ち合わせ（12／3）

副部長との打ち合わせ（12／3）

委員へ日程表を配る（12／3）

書類の作成・整理・確認

リボン・事務用品の確認と補充

松下徽章へ賞品のメダル発注

野口商店へ賞状入れの筒発注

額（太玄大賞分）購入

事業部へ賞状の発送依頼（揮毫者宛）

30 1 審査終了後、各社中へ受賞代表者申告用紙を配布、集約（1／10）

呼名簿の依頼（1／10）

代表者名簿の作成

賞状の揮毫と確認

精養軒に式次第を依頼

会場案内図・席次表作成

賞状・賞品等を各社中へ発送 (1/21)

会場設営 (1/21)

授賞式運営 (1/21)

◎祝賀会部 (担当 大河原由佳)

29 11 各社中の事務担当者に依頼書 (祝賀会出席者希望数・リボン  
送付先住所氏名)

会費振込用紙を送付 (11/7)

従来通り立食パーティー、当日受付ありで行う

12 精養軒と打ち合わせ (12/22)

委員に書類送付 (12/26)

12 当日までの準備

～ ・出席人数把握 ・会費納入確認 ・次第の確認

30 1 ・書類作成 ・看板 (舞台上の確認) ・リボン確認

・案内表示作成 (揮毫スタンド用社中名表示、テーブル拡大

表示、当日来賓受付表示、控室案内表示)

各社中に出席者数リボンを指定先に送付 (1/9)

精養軒と最終打ち合わせ

祝賀会 15時00分～部長・副部長・委員集合、打ち合わせ (1/21)

(1/21) 15時30分～仕事準備

16時00分～当日受付開始

17時40分～会員入場

17時55分～来賓入場、祝賀会開会。今回より受賞者紹介を

実施

19時20分～祝賀会閉会、退場

出席者数 申込み 247名

来賓 41名

当日申込み 27名

合計 315名

◎学生部 (担当 佐々木幸葉)

29 10 第2回学生選抜展書類を各社中 (13社中)へ発送

12 書類搬入日 出品一覧・表具料振込・領収書コピー

風雅プランニングに第2回学生選抜展入選者名一覧の作成依頼

30 1 搬入日 作品搬入受付・出品点数確認

陳列日 各学年別、二室に三段掛けとして展示

(証発送 一般部の褒賞部と一緒に、学生部の入選証と入選者

一覧を各社中へ発送

最終日 14時半終了 15時より軸をおろし、整理

※第2回学生選抜展出品者数 398点 (前回210点)

# 平成30年度 事業計画表

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
30・4・15	運営委員会・理事会	総会関係・第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展) 当番審査員決定方法・日程 その他の確認	上野精養軒
	平成30年度定期総会	事業報告・会計決算報告 事業計画・予算案審議・その他 懇親会	
5・9	運営委員会	第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展) 第60回記念太玄会書展関係 (60周年記念祝賀会等) その他(特別講演会等)	上野精養軒
6・13	事務局、部長会議	第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展関係) その他(60周年記念祝賀会等)	上野精養軒
7・11	運営委員会	第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展関係) その他(60周年記念祝賀会等)	上野精養軒
10・10	事務局、部長会議	第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展関係) その他(60周年記念祝賀会等)	上野精養軒
12・2	運営委員会 理事会	書類搬入 第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展関係) 忘年懇親会	上野精養軒
31・1・7	第60回太玄会書展 (併催第3回学生選抜展)	搬入 審査(会員賞選考) 審査(準会員・公募) 陳列 初日 授賞式・祝賀会 最終日	東京都美術館 東京都美術館
1・1・26	特別講演会高橋利郎先生(予定) 特別展示 (作品解説)		上野精養軒 東京都美術館
1・1・20			
1・1・19			
1・1・9			
1・1・8			
4月上旬	会計監査	第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展) 反省会 その他	上野精養軒
4・14	運営委員会 運営委員会・理事会 平成31年度定期総会	役員改選 事業報告・決算報告 事業計画案・予算案審議 その他 懇親会	上野精養軒

# 平成30年度 役員構成

名誉顧問	梅原 清山			
常任顧問	福田 丞洲			
会長	垣内 楊石	田中 鳳柳		笠原 聖雲
副会長	石川 流芳	西村 東軒		
董事	鈴木 映華	瀧沢 曲峰		
理事長	落野 雅宣			
副理事长	小原 天籟	宮負 丁香		
事務局長	金丸 鬼山			
副事務局長	伊東 玲翠	江原 見山	伊場 英白	
	小出 聖州			
運営委員	垣内 楊石	石川 流芳	西村 東軒	
	落野 雅宣	小原 天籟	宮負 丁香	
	鈴木 映華	瀧沢 曲峰	金丸 鬼山	
	伊東 玲翠	江原 見山	伊場 英白	
	小出 聖州	海野 十方	大場 大幹	
	下谷 蘓雪	飛田 冲曠		
理事・総務	石島 廻山	遠藤 有翠	木全 珠香	
	高橋 江東	植木 蒼穹	鎌田 龍祥	
	中尾 勝子			
監事	高橋 心行	中田 珪川		
理事・実行委員	足達紫鳳	新井清玉	荒井湧山	石井蕙園

理 事

川上白鳳	垣内玉華	太田芳琴	浦田楊月	伊藤遙山	石黒自耕	會田春燕	山口香葉	三根揚輝	増田山鄴	吹原草扇	長谷川溪華	南部碧章	富山虎跑	滝澤聖華	佐藤龍聖	小林碧桃	黒田桂泉	龜ヶ谷深翠	大窪昇鶴	伊藤慈恩	石井香村
川谷淳子	勝又慶竹	大畑晃翠	遠藤鈴響	岩井壹龍	板垣芳蘭	青木芳濤	山村鳳羽	村松鳳襟	増永楊蘭	細谷芳月	長谷川香濤	西澤厚子	鳥越新芽	田邊艸水	嶋田白染	近藤寿泉	小池鱗華	川端敏江	笠井津仙	菴澤幸楓	石井珠翠
川本景月	加藤径石	岡崎翠晃	大木暁峰	植村暁恵	板倉建昇	浅香麗芳	山本白鷗	森 久圃	三上彩風	堀越壽嵩	稗田影風	西谷香峰	中元泰乘	田村昇鶴	志村恵風	佐々木恵陽	小泉興起	倉持栄秋	片倉道子	大河原由佳	石坂翔鳳真
菊野白濤	嘉門瑤泉	小野敏之	大竹伯燿	馬居李帆	伊藤桐花	池田紅華		山内浪華	南 溪石	前川郷石	露野祐涯	橋本春溪	並木金紫	柘植金瑠	返町恵風	佐々木幸葉	小林紫雲	黒川白嶺	上嶋桂風	大木秘翠	伊藤紫香

			渡辺玲雲	横山惠華	山下玉水	山崎寛齋	宮原真玄	御園生溪鳳	堀 桃泉	藤岡悠苑	原田彩翠	林 幸恵	西澤翠香	内藤秋麗	田村麦浪	竹内游月	高橋興舉	杉本雅峰	下村清子	櫻井玉苑	小泉香園	久保田芳仙
				吉田景雲	山田騰沸	山崎琇園	宮本芳秀	三岡翠風	真岸京湖	古谷善子	弘田長風	林 韶舞	新田白楊	中垣郁芳	段野裕子	田中恵康	高橋心華	鈴木恵理	末永照英	笹井芝雪	小堀薜穂	倉田桂華
				吉田恵子	山本皓月	山崎翠嵐	三好凌香	蓑 青松	松尾蘭月	星野遙涯	露野研涯	林 鳳仙	長谷川流祥	中西甫子	坪川九翠	田中盛觀	田上洋香	清宮白鷺	杉浦華英	佐藤北峰	小宮柳岱	栗田伯陽
				渡部越愁	湯浅瑞雲	山崎洋子	山内紀隆	宮嶋吾風	松田爽花	細田耕仙	福田節子	林 賢子	花澤雙鴻	中森茶月	徳永みや子	田中柳暉	宝田暁蓮	関根曉香	杉本英華	下島東僊	小山泰雲	黒川虚白

# 第59回太玄会書展入賞による昇格者

## 理事実行委員へ4名

大森 鳳城 清水美代子 須田 瑞兆 高山 爽快

## 理事へ10名

宇野 静香 柏原 桂雪 小和田恵風 下原 春美  
 田辺 心苑 松橋 多恵 皆川 蘭香 望月 俊邦  
 山口 杏園 山田 光倫

## 審査委員へ6名

石川 翠鈴 一万田慶舟 川名 櫻苑 菊地 梨祥  
 佐久間輝珠 三浦 利恵

## 会員へ20名

石井 光子 伊東 紫艶 上野 華雪 牛澤 智水  
 海老沢京香 遠藤 桃葉 小川 爽歩 尾崎 清爽  
 木津 純子 佐藤 紫泉 下城 蓼華 鈴木 堅心  
 鈴木 万深 高野 秀影 玉井 思醉 峯岸美知子  
 宮川 彩波 宮地 豊苑 山崎のり子 吉田 庭鳳

## 準会員へ31名

石井 茜音 石川 光籠 伊藤 聖夏 牛口 仙桃  
 薄木 逸醉 江上 桐佳 岡山 旭洋 鎌形 美容

## 平成30年 事務局構成

草間 清晨 毛塚 佳泉 佐藤 響雅 下間 明燈  
 仙石 良子 高橋 希兆 田中さち子 遠山 陽江  
 豊田 光曉 中山智加江 夏目 紅恵 西方 勇玟  
 西端 茂 二瓶 花僊 平田 光空 平野 渚秋  
 福塚 光徳 藤原 博子 本間 雅鳳 山井奈々子  
 横溝 早苗 渡辺 仁美 和田 光翠

事務局長 金丸 鬼山 江原 見山  
 副事務局長 伊東 玲翠 小出 聖州  
 会計部 下谷 蕪雪  
 事業部 露野 祐涯  
 広報部 荒井 湧山  
 渉外接待部 石井 蕙園  
 図録部 伊藤 慈恩  
 搬出入部 山口 香葉  
 審査事務局 山村 鳳羽  
 陳列部 大場 大幹  
 褒賞部 小泉 興起  
 祝賀会部 大河原 由佳  
 学生会部 鳥越 新芽

# 平成30年度 総会・懇親会風景

平成30年4月15日(日)16時開始 会場：上野精養軒

## 総会風景



昇格者の紹介



議長 笠原聖雲常任顧問（中央）

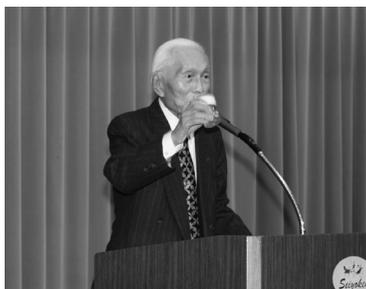


垣内楊石会長挨拶



総会風景

## 懇親会風景



乾杯発声 田中鳳柳常任顧問



乾杯



垣内楊石会長挨拶



司会進行 小出聖州副事務局長



懇親会風景

# 第60回記念 太玄会書展 [併催 第3回学生選抜展]

## 日程表

年月	日	曜	作業内容	時間	会場	担当部
31	1					
7	7	月	搬入	10:00～12:00	都美搬入室	搬出入部
8	8	火	会員賞選考	11:00～	都美審査室	審査事務部
9	9	水	鑑別・審査	11:00～	〃	〃
19	19	土	陳列	10:00～	都美展示室	陳列部
20	20	日	開会式 授賞式 祝賀会	9:30～17:30 16:30～ 18:00～	都美展示室 上野精養軒 〃	会場当番 渉外接待部 褒賞部 祝賀会部
22	22	火	開会	9:30～17:30	都美展示室	会場当番
23	23	水	開会	9:30～17:30	都美展示室	〃
24	24	木	特別講演会	14:00～	都美講堂	〃
25	25	金	開会	9:30～17:30	都美展示室	〃
26	26	土	最終日 作品撤去	9:30～15:00	都美搬入室	搬出入部

## 役員及び各部部长

名誉顧問	梅原清山	理事・総務	石島廻山
常任顧問	福田丞洲	理事・総務	遠藤有翠
常任顧問	田中鳳柳	理事・総務	木全珠香
常任顧問	笠原聖雲	理事・総務	高橋江東
會長	垣内楊石	理事・総務	植木蒼穹
副會長	石川流芳	理事・総務	鎌田龍祥
副會長	西村東軒	理事・総務	中尾勝子
董事	鈴木映華	監事	高橋心行
董事	瀧沢曲峰	監事	中田珪川
理事長	落野雅宣	事業部長	落野祐涯
副理事長	小原天籟	広報部長	荒井湧山
副理事長	宮負丁香	渉外接待部長	石井蕙園
事務局長	金丸鬼山	図録部長	伊藤慈恩
事務局長	伊東玲翠	搬出入部長	山口香葉
事務局長	江原見山	褒賞部長	山村鳳羽
事務局長	伊場英白	祝賀会部長	小泉興起
副事務局長	小出聖州	学生会部長	大河原由佳
副事務局長	海野十方		鳥越新芽
理事・運営委員	大場大幹		
理事・運営委員	下谷蘊雪		
理事・運営委員	飛田冲曠		

# 第60回記念 太玄会書展入賞・入選者

## 理事・実行委員の部

### 記念賞（五十音順）

大河原由佳（書王） 小林碧桃（書星） 嶋田白染（書人）  
滝澤聖華（真仙） 鳥越新芽（菅菰） 西谷香峰（鳥跡）  
橋本春溪（九龍） 落野祐涯（高友） 堀越壽嵩（燎原）  
山村鳳羽（研友）

## 理事の部

### 太玄大賞（五十音順）

會田春燕（書人） 植村暁恵（真仙） 小山泰雲（真仙）  
笹井芝雪（青龍） 清宮白鷺（書星） 田中恵康（書星）  
藤岡悠苑（九龍） 山崎翠嵐（研友）

## 審査委員の部

### 太玄賞（五十音順）

石井滂翠（高友） 江原紫光（書人） 川津恵鮮（書星）  
小林嶺風（真仙） 鈴木春岨（書星） 田中華苑（九龍）  
本間杏雪（青龍） 吉村清志（鳥跡）

### 全日本書道連盟賞（五十音順）

市川志玉（真仙） 小山君代（書王） 齋藤清華（九龍）

西岡虹舟（燎原） 羽山多望（書星） 松口翠葉（鼎墨）  
村上舩舟（菅菰） 山地暁翠（研友）

## 会員の部

### 特別賞（五十音順）

大須賀竹仙（書人） 垣内楊玄（九龍） 鈴木竹園（書星）  
塚田恵子（書王） 寺澤紀芳（真仙） 時田大祥（書星）  
山上玉僊（書人）

### 奨励賞（五十音順）

荒井珠鶴（燎原） 北村如雲（九龍） 倉田柳珠（研友）  
鈴木夢雅（高友） 高橋英峰（真仙） 中島翠霽（書人）  
芳賀光珠（書星） 濱田桂香（書星） 二木眞木（真仙）  
山田松陽（高友） 龍頭溪仙（菅菰） 脇本大幹（九龍）

### 会員新人賞（五十音順）

新井恵泉（真仙） 飯田歌林（九龍） 尾崎清爽（書星）  
小俣柏翠（書人） 釜田響（菅菰） 京増瑞葩（研友）  
小林翠香（書研） 近藤龍岳（高友） 篠原純子（鳥跡）  
関谷白瑤（書星） 高野秀影（書人） 西岡山州（燎原）  
西村智範（九龍） 原田兆祥（書星） 村田典子（真仙）

## 準会員の部

推選（五十音順）

阿部弘信 石丸英僊 板垣仙露 上村高子  
 牛口仙桃 榎本華艷 大木操守 大坂八知枝  
 小野凌水 川井韶瑞 草間清晨 小暮兆琳  
 小松秋香 猿田紫陽 清水春草 鈴木光鶴  
 鈴木智子 高橋玉泉 田島由美子 土屋爽流  
 遠矢虚圓 西村果仙 平野渚秋 増井紅翠  
 増田澄靖 町野蘇萌 松井芙蓉 松浦桃苑  
 宮本翠邦 家中麗醉

準推選(五十音順)

相木小百合 浅古祐子 安藤翠珠 石原成雅  
 井出隆鳳 伊藤聖夏 菴澤御櫻 宇田川翠扇  
 内田黄鳥 岡山旭洋 小川美笙 小澤雲峰  
 小原さと美 垣内一楊 掛川和光 方波見早子  
 加藤暉川 菊地将太郎 沓澤絵梨 栗原紫翠  
 国分滋潤 小菅啓子 小林紫玉 小林洋子  
 小松崎紫流 佐藤小睡 佐藤蒼艶 佐原美醉  
 篠原翠春 島村有醉 下間佳璋 鈴木美晁  
 竹内翠紗 田中さち子 田中春敬 津幡昇仙  
 手島萬峰 富本琇瑩 内藤妙子 中村丹裳  
 中元玉蘭 二瓶花僊 野々宮荷香 平田光空  
 藤田晶洋 藤平玉峰 古澤恵子 細萱玲風  
 細測金杏 松永愛泉 宮本恵玉 宮本恵元  
 村上静竹 村山霜紅 室井春草 茂木朱櫻

公募の部

特選(五十音順)

守田禎香 山井奈々子 山形翠簫 山岸信彦  
 山田香雪 油井謙輝 横溝早苗 吉本余榮

阿部寛 有坂義隆 石井鏡子 石井起和  
 石川惺楓 市川嘉恵 伊藤兆菜 稻生妙子  
 岩渕福仙 浦崎沁雅 大野光照 大野青霞  
 大場青峰 岡島寿石 岡野ひろみ 小澤奈穂美  
 片倉幸 神田絹香 窪田静花 小出厚隆  
 後藤詩織 後藤爽紀 笹木瑞希 清水享鶴  
 鈴村早秀 高内芝蘭 高橋翠嶺 寺岡恵風  
 深川兆瑤 福岡華泉 福本明暢 藤永真里  
 古川紫虹 松野浩範 松丸流雲 山本紫香  
 山本碧霄 山本縁里

準特選(五十音順)

荒井蓬月 荒井桃子 池田加代子 板垣杏奈  
 伊藤幹夫 井上紀秀 井堀咲麗子 植松走風  
 瓜田余響 大川華風 大河原佳子 太田君江  
 大山紫彩 岡田信来 小野翠香 小野田子雪  
 尾和恵扇 風間翠泉 片山廣楓 勝畑喜市郎  
 加藤紅苑 金井薫姚 狩生久美子 川島遙青  
 川谷淳一 川端紫雲 川畑美風 久保田溪堂

熊谷 弘	金子きみ代	小川光慶	大木起代子	白井紫音	一乘敬子	石井梅香	青柳健次	入 選 (五十音順)	吉田直美	山野井青蘭	矢田貝恭子	松沢上清	藤崎澄瑩	平野豊溢	根本恵和	豊嶋智勇	玉井香敬	竹中光順	鈴木教子	眞田星鳥	櫻井美津枝	小池礼凌
倉持昌世	木戸口美愁	小澤洋子	大熊 勇	浦田実佳	井出清玉	石川清香	荒原香堂		渡辺佳祥	横瀬晃子	山浦柚美	古谷幸子	深野幾与子	長谷川恵子	長尾和香	田村游古	竹本菽嶺	蘭田紫苑	島本春舫	佐々木芳華	小杉恵美子	
栗本 暁	木下正覚	甲斐谷朋隣	大森栄芳	榎本輝映	伊藤英里	石田正道	飯田小夜子		渡邊青鳳	横瀬克江	山上尚子	堀江直美	福島征英	長谷川洸春	長橋葉鶴	段野真希	田中春暉	染谷君恵	下原春樹	佐藤桐撰	児山九聲	
黒田真弓	草間秀幸	片岡久美子	岡本美佳	大井綾華	今井香澄	磯谷ひなた	飯野秀一			吉川真紀	山田緑水	三木智加	増田青溪	長谷川理華	南雲鷺草	寺崎登美子	田中嶺華	高井則子	莊保浩子	佐鳥光浩	坂 貴大	

渡邊青羅	米倉喜美代	尹 永浩	森 敬子	三木頼子	松村三紀子	藤沢貞行	原田勝枝	根本由紀	中山さおり	長尾桜春	手塚恵翠	田中玲子	武田久代	高松黎明	高木睦子	鈴木麻美	仁多玲風	佐藤保恵	櫻田明道	神足すみ江	小池俊宇
	米澤志織	吉田 愛	森 千花	水吉福子	丸山兆基	藤田靄香	膝附史穂	能瀬ゑみ	奈良京華	中澤陸美	東瀬青綬	谷澤藤花	田所佐季	高柳浩美	高橋越雲	鈴木光濟	菅原董泉	佐藤優衣	佐々木啓春	小林富子	小坂橋雅子
	若麻績弘道	吉野清美	山田静光	宗島余光	三浦道子	船橋仁美	広沢光香	橋本麻希	西岡美知江	中島みつ子	徳永慈峽	谷 俊子	田中多加代	竹内百紀江	高橋秀俊	鈴木白明	杉山葉月	重田江彩	佐藤 英	小松彩心	小出春扇
	綿内良子	依田紅瑞	山田緑亭	村山すゝ江	三浦嘉乃	穂積青潭	福本澄鮮	林 葵丘	西澤緑風	長田正博	内藤芳則	千野霜月	田中裕也	竹治青麗	高橋幸江	須藤隆史	杉山雅子	志村 恵	佐藤榮壽	坂口白峰	小岩瑞季

## 第60回記念 太玄会書展 会場風景

平成31年 1月20日(日)～26日(土) 会場: 東京都美術館



特別展



会場風景



陳列風景



学生展



DVDコーナー



特別展

## 第60回記念 太玄会書展 審査風景

平成31年 1月8日(火)～9日(水) 会場: 東京都美術館



審査2日目



審査1日目



会員賞選考風景



審査部スタッフ



審査2日目



当番審査員



会員賞選考委員

# 第60回記念 太玄会書展 授賞式・祝賀会

平成31年 1月20日(日)16時30分開始 会場：上野精養軒

## 授賞式



運営委員



審査事務報告  
山村鳳羽審査事務報告



挨拶  
路野雅宣理事長



開会の辞  
小原天籟副理事長



授賞式風景



今年度当番審査員



全日本書道連盟賞授賞者



太玄賞受賞者



太玄大賞受賞者



記念賞受賞者

## 祝賀会



乾杯の辞  
田中鳳柳常任顧問



大東文化大学教授  
高橋利郎様



挨拶  
垣内楊石会長



開会の辞  
西村東軒副会長



閉会の辞  
石川流芳副会長



祝賀会風景



## 作品解説



運営委員 瀧沢曲峰先生



副会長 石川流芳先生



副会長 西村東軒先生



事務局長 金丸鬼山先生



副理事長 小原天簫先生

## 席上揮毫



理事実行委員 須田瑞兆先生



理事実行委員 清水美代子先生



理事長 露野雅宣先生



会長 垣内楊石先生



運営委員 大場大幹先生



副事務局長 江原見山先生



副事務局長 小出聖州先生



理事実行委員 高山爽快先生



会長 垣内楊石先生



伊場英白先生 大場大幹先生



運営委員 飛田冲曠先生



事務局長 伊場英白先生

## 特別講演

演題…「幕末文人趣味から現在の書へ」  
講師…高橋利郎先生

### ◎講師紹介

昭和47年静岡県富士市生まれ。  
財団法人成田山文化財団成田山書道美術館学芸員を経て、現在は  
大東文化大学文学部書道学科（文学研究科書道学専攻）教授。主な  
著書「日本の書 維新―昭和初期」（2009）、「江戸の書」（2010）、「近代日本における書への眼差し―日本書道史形成の軌跡―」（2011）等



### ◎講話

只今、ご紹介を頂きました成田山美術館の高橋利郎と申します。今回は太玄会の先生方の作品と一緒に成田山書道美術館所蔵の作品を21点展示させていただきます。10年前に太玄会の50周年記念展の時、太玄会で活躍されました先生方の作品を展示され、立派な図録を作られていました。今回はあえて太玄会の歴史を辿る視点ではなく、江戸から現在までの日本の書を辿れる展示にしたいと考えてまして作品を選ばせていただきました。

書道というのは国民芸術というくらい草の根まで入り込んでいま

す。ですから江戸時代から全国各地に作家がおります。そこから満遍なく選ぶとなりますととても20点では収まりきれませんので、極力、江戸と東京を中心とした書家の作品を集めてみました。ですから幕末の貫名菘翁、頼山陽のように京都・大阪で活躍した作家は除かせていただきます。

ただ、太玄会に縁の深い作家として赤羽雲庭先生、青山杉雨先生の日展、読売書法会出品の少し大きめの作品もお出しするようにいたしました。これらも全て成田山書道美術館で所蔵しているものです。

### 太玄会との縁

さて、成田山書道美術館は千葉県にございますが、太玄会を組織している書星会の先生方とは大変親しくさせていただいております。2019年の秋、千葉県書道協会の役員展を開催することになっており、そこで本館所蔵の浅見錦龍先生の作品展示をさせていただくことになりました。また、成田山新勝寺に入口に総門の向かって右側に「成田山新勝寺」と書かれた大きな石柱がございます。こちらは梅原清山先生に書いていただきました。青山杉雨先生の作品も多数所蔵させていただきました。また赤羽雲庭先生生誕百周年の展覧会を開催しましたが、その開催に当たっては会長の垣内楊石先生にも大変お世話になりました。その際には田中鳳柳先生には記念講演をしていただきました。また西村東軒先生にも大東文化大学で大学院生向けの特別講義

をしていただくことになっています。このように太玄会の皆様方とは浅からぬ縁があって、私もお招きいただいたと思っております。

## 時代の流れ

本日の話は、タイトルの「幕末文人趣味から現代の書へ」というように概ね1800年以降の江戸時代のお話をしようと思っております。そこから約200年の間、明治維新という大きな変革がありました。また関東大震災、第一次・第二次世界大戦があり、その後東日本大震災など、大きな変革の時期を経てきました。この間、産業面から見ても江戸から明治にかけて大きな産業革命の時代も経ており、鉄道が走るなど交通網が充実することで、人口の流動性が高まっています。江戸時代のまだ封建制度の頃は、その土地で一生を送るというのが普通でした。ところが明治時代以降は、関西から東京へ移り活躍していく中で家を構え、そこで生涯を全うする生活スタイルも頻繁におきてきます。そうなりますと文化的なことがだんだんミックスされていくわけです。地方文化が中央文化になったり、中央文化があつという間に地方へ伝播することが頻繁に行われるようになっていきます。

書道においても同様で、地方の表現が中央の表現になったりすることがしばしば起こりました。

ところで、江戸時代の人々は基本徒歩で移動していました。当時は移動を目的としたら一日40kmくらいは歩いたようです。片道20km位ですと一日仕事でよく行われていたようです。そう考えると江戸時代から現代というのは、もの凄いスピードで移り変わった200年間だったのだと感ぜられます。

書道の世界も大きく時代は移り変わったと言えますが、核心的なこ

とは余り変わっていないとも思えます。ここからは、場面を限りながらその辺たりを紹介させていただきます。

## 幕末文人と八百善

今日は、東京都美術館でお話が出来るといふことで、この台東区の周辺の書道史に触れてみたいと思います。

この建物(図1)は、

関東大震災の時に崩れてしまいましたが、八百善という料亭を描いたものです。このように二階建てでかなり大きな建物だったようです。この八百善は、江戸の会席料理を出す料亭として当時有名だったところでした。浅草の山谷に開業しましたが、その後上野店も開店し、繁栄期には両国、赤坂にも支店を出していたようです。その後はデパートにも入り、鎌倉にも支店があります。

会席料理というのは多くの場合、関西風の日本料理のことを言います。江戸料理とは、お節料理のようにこてつとした甘みのある料理を想像していただけると良いかと思えます。店のあった場所は、浅草寺に向かつて右奥にあり、隅田川沿いにありました。この会場からだとJR上野駅の入谷口を出て、隅田川の方へ進んでいったあたりです。当時、このあたりには吉原がありました。また隅田川の花見など文化

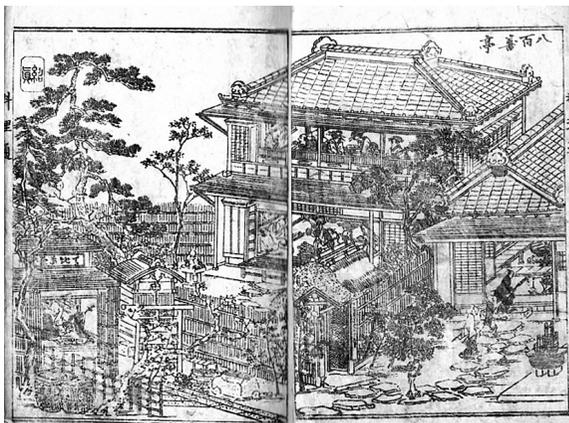


図1

の中心地だったわけですが、それが大正時代くらいまで続き、昭和初期になると次第に衰退していきます。客は、吉原に繰り出す前にこの八百善で料理を食べていく、あるいは吉原で待たされている合間に料理を食べて再び繰り出すような事をしていたようです。八百善の店主は、代々栗山善四郎という名前を名乗ります。最近の料理番組でも跡継ぎの方が出演していましたね。

この図(図2)は、歌川國貞という三代目豊國を名乗る人の作品です。三枚もの浮世絵です。奥に八百善と描かれています。当時は江戸の名所に美人を合わせる「名所絵」というのが多く描かれました。他にも「美人合」「江戸名所百人美女」など、名所に美人を合わせた浮世絵が沢山作られるようになりました。このことから八百善が江戸ではかなり有名だったことが伺われます。ご覧のように藍色がとても綺麗ですね。

また、この書物は「料理通」(図3)という八百善の料理レシピです。



図2

1822年に第1冊が刊行され、1835年までに第4冊が出されました。この本は、ただの料理集だけでなく、当時の八百善に通った文人たちが挿絵や狂歌が入っており、それぞれの姿を見ることが出来、当時は長い人気を保った本だったようです。ちなみにこの料理通は、春夏秋冬に分かれており、それぞれの献立が書かれています。なかなか通なものが出されています。徳川家の重臣も多く立ち寄っています。当時は鷹狩りが流行っていましたが、そこでの獲物を持ち寄って料理してもらったこともありました。また、ペリーが来航した時、接待で料理を出したのもこの八百善です。大変手間暇をかけてつくる料理なのですが、この江戸料理はやや味が濃かった様です。また、大正時代になり交通の便が良くなり、東西の文化が入り交じるようになります。関西の料理も次第に江戸へ入ってくるようになり、見た目が美しく、味も淡い関西料理が江戸にも広がることで、次第に庶民の好みも変化していきました。その意味で、八百善が最後まで江戸料理を守ったと言って良いでしょう。

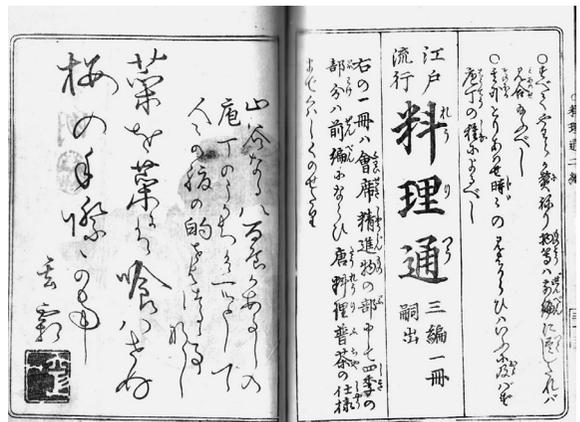


図3

### 卓袱料理（※1）

この図（図4）は、八百善の二階の様子です。男性4人が寛いだ様子で卓を囲み、楽しそうに食べている様子が窺われます。この料理は今では普通となりましたが、一つの料理をみんなで箸をつついて食べています。しかし、当時はほとんど一人一人の箱膳です。このように大皿に盛った料理をみんなで取り分けて食べる、またはワイングラスのようなものを持つていることから、南蛮風の料理を食べていることが想像されます。文献記述からここで食べているのは、長崎で有名な卓袱料理だと言ったことが分かります。卓袱料理は、清朝から伝わってきた中華料理の中でも禅宗のお寺で作られた精進料理が基本になっています。この台のことを卓袱台と言い、朱色

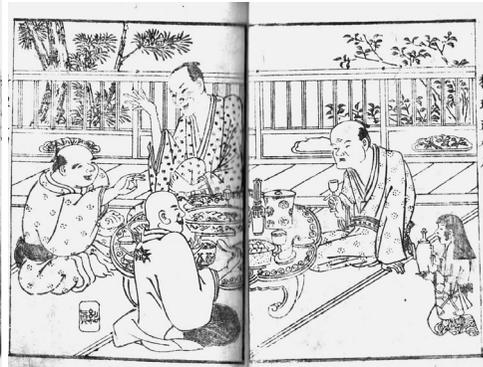


図4



図5

の漆で塗られ4本の脚がついています。こちらの図（図5）は、長崎県の丸山で清人と一緒に卓袱料理を食べている様子です。観ていただくと椅子に座っていますね。元々は中国スタイルなのです。当時は何かあるとこの卓袱料理を囲んでみんなでついで食べていたようです。

この八百善の主人は大変勉強熱心で、普茶料理（黄檗宗の寺で調えられる中国風の精進料理）を勉強するために宇治の黄檗山萬福寺（図6）（※2）や大阪や長崎にある禅寺へ行つて卓袱料理を学んでいます。また、萬福寺を開いたのは明人の隠元隆琦いんげんりゅうきですが、当時、張瑞図等と直接交流のあった人のようです。明末清初の中国文化の中で生きていた人が京都へやってきて開いたお寺です。この時、張瑞図や董其昌の書、焼き物なども沢山将来しています。つまり明の文化がリアルに運び込まれたわけです。当時、日本人は中国から将来された物を見ることが出来ても、中国文化を持つ人が入ってこないため、情報をどのように理解していいか分かりませんでした。そこへ都の近くに黄檗山萬福寺が建立されたことよって、小さい中国が近所に来たようなものですから、みんなそこへ通うようになるわけです。ここには書や絵画の世界だけでなく、八百善のように料理の世界の人たちもみんな集まってきました。また煎茶が広がっていくのもここからでした。宇治の煎茶が有名ですが、これも萬福寺があったからと言えま



図6

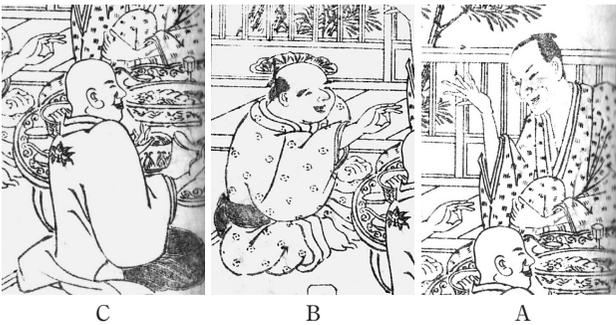
す。また、音楽（明清楽）、布（衣服）などもここから広がっていきます。近衛家熙もここへ通って中国の文化を吸収していった人です。このように都の近くで中国の拠点になっていくわけです。ちなみに今でも萬福寺に行くと当時の普茶料理が食べられます。

### 幕末文人たちの交流

（亀田鵬齋、太田蜀山人、大窪詩仏、酒井抱一）

先ほどの（図4）にある4人ですが一体何者なのか、今日では具体的に誰かが分かっています。中央が亀田鵬齋④です。この絵から長身でかなりのイケメンですね。江戸の下谷金杉（現在の入谷）に住んでいました。折衷学派の第一人者で、朱子学を唱える人に意義を唱

えている人でした。右側が太田南畝⑤です。狂歌師として有名な人物です。左側が大窪詩仏⑥という詩人です。手前の剃髪した人が絵師で有名な酒井抱一⑦と言われています。そしてこの絵を描いているのが浮世絵の鉄形蕙齋⑧です。この人たちはみんな八百善の常連で、みんな下谷周辺に住んでいました。この人たちが、長崎で有名な卓袱料理を江戸に伝え、有名にしていく役割を果たしました。八百善の事を記した本を読むとこの酒井抱一が一番の常連客だったとあります。「菊亭八百善の人々」（NHK



C

B

A

月曜ドラマシリーズ2004年3月から連続7回放送…9代目の妻として老舗料理屋を再興させた若い女将の細腕繁盛記）の舞台になったのもこの八百善です。

かめだほうざい  
亀田鵬齋（1752～1826）

そして、この江戸流行料理通（図7）を見ていくと、八百善料理本とあり、この赤貝の絵を描いているのが酒井抱一です。その後から序文が記されているのですが、これは亀田鵬齋の書です。

これは楷書体で丹念に書かれています。少し細身ですが顔真卿の書風が入っています。「亀田は越後がえりで字がくねり」という川柳があるのですが、旅の途中で新潟県出雲崎へおもむき良寛（1758～1831）と縁を結び、そこから懐素にも大きく影響を受け、くねくねした字になったと言われています。

また八百善に関わる歌があります。蜀山人の狂歌で「八百善かやどは伊尹の割烹家湯をもとむることはあらしな」（図8）というのがあります。その他にも「詩は詩仏書は米庵に狂歌おれ芸者お勝に料理八百善」というのも詠っています。この人た

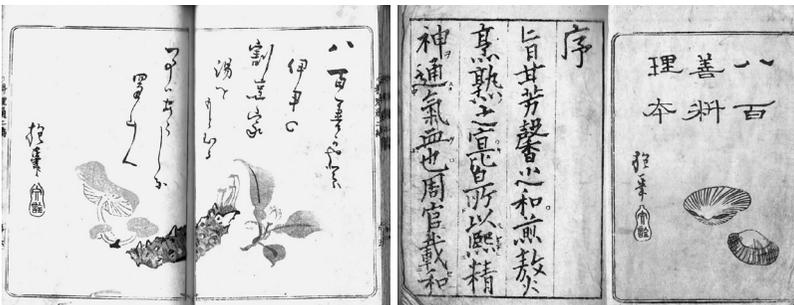


図7



図8

ちはみんな八百善の料理を食べた人と言っていると思います。

近代になるまで八百善の評価は大変高く、明治から大正にかけての八百善の主人は、古筆マニアでした。増田鈍翁（1848～1938）明治から昭和初期に書けての実業界の巨頭。美術品蒐集家としても名高い。「平家納経」複製本制作の援助をするなど美術の普及、保存にも功績がある。や田中親美（1875～1975）京都生まれ。大和絵の画家、高菜有美の子。古筆の模写で有名で「紫式部日記絵詞」「源氏物語絵巻」「平家納経」などを手がけた。根津嘉一郎（1860～1940）日本の私鉄界の雄と言われた企業家。生前に蒐集した古美術品から没後に根津美術館が設立された。等は、頻繁に八百善に通って古筆の鑑賞会を開いていました。そうしていく内に八百善の主人は古仏の鑑定家としてもプロになっていきます。

おおた なんぼ  
**太田南畝**（別号：蜀山人）（1974～1823）

この肖像（図9）は、おそらく66歳の図だと思われま

す。（二代目市川左團次が所有していた幅。現在は成田山書道美術館に所蔵。）この人は10代から狂歌師として有名です。社会風刺に富んだ歌を詠んできました。下級武士の出身ですが、官僚の登用試験にトップで合格した人です。その後高



図9 D

級官僚になっていきます。いくつか寿像が残っていますが、この人の年齢の重ね方がよく分かります。「鏡にて見知りこしなるこの親爺お目にかかるも久しぶりだな」「年も早や既に日本の国の数なお萬国の図をや開かん」当時、日本は66国でしたので66歳だったと考えられます。書は張瑞図の影響を受けているかと思われま

す。漢学に非常に長けていましたので、当時の中国趣味には敏感だったと思われま

す。この人は勘定方で出世していきますが、初めに大阪の銅座（蜀山）に赴任します。その後、長崎奉行所へ転動になりますが、長崎には唐人館があり、そこへかなり出入りし中国文化を体感していたようです。それがこのような画風になったのだと思います。

おおくぼしぶつ  
**大窪詩仏**（1769～1837）

大窪詩仏は、常陸（茨城県）の人で、市河寛齋に詩を学び、山本北山に儒学を学びました。神田お玉が池に詩聖堂を構え、菊地立山、柏木如亭等とともに平易で清新な俳諧に近い詩風を広め、江戸漢詩壇の大御所として人気を博しました。

さかいほういつ  
**酒井抱一**（1761～1829）

酒井抱一は、姫路藩主の弟です。西本願寺に出家し37歳で法体（剃髪し法衣をまとうこと）になります。西新井大師に大きな狗の絵馬があるのですが、それを描いたのが酒井抱一です。またその絵馬を奉納したのが栗山善四郎です。42厄年に酒井抱一の絵馬を描いてもらい奉納しました。それが現在は国宝になっています。

酒井抱一と言えば、有名なものに風神雷神図屏風絵があります。また、尾形光琳や本阿弥光悦の影響を受けた人です。尾形光琳の作品を

盛んに模写していたようです。ですからこの人の作品は、この二人の画風が合作した物をイメージして制作しているのが特長です。また、書も光悦の影響を多く受けています。酒井抱一の時代は、光悦や宗達よりも光琳が圧倒的に有名でした。光琳を通して光悦や宗達を学んでいたようです。そもそも琳派というのは、京都や大阪で花開いた文化ですが、酒井抱一が登場してから江戸でも盛んになっていきました。

この作品(図10)は半切2/3位の大きさの掛け物に描かれた蚊の絵です。蚊といってもヤブカやアカイエカではなくカトンボ(ガガンボ類)です。夏の夕方に電気を消すと玄関にふわふわ寄ってくる手足が長く血を吸わない蚊です。酒井抱一は、琳派の中でも博物図も描いていました。文化文政期に入ると先ほどの蜀山人の自画像もそうでしたが、リアルに描く画風が流行いたします。まさに図鑑を制作するような作業です。ところが解説の一つもあれば図鑑に見えるのですが、この絵はそうではないのです。

書の表現は確かに琳派を踏襲しているのですが、「草木繁茂の地に其形ち蚊の如にして大さ蜻蛉に異ならず。蚊の親と称するもの有。翼よわく嘴利からずして人に近づかず。鳥獸の血を吸ず。故に人も又是を悪ず。塞翁が馬、麒麟猫に類する物也。」となり、蚊は空想上の動物と変わらず、何も害を与えないと言っているわ

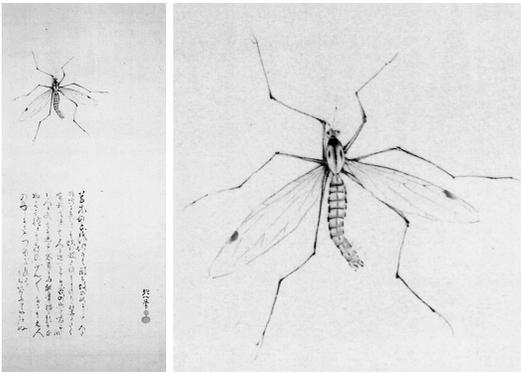


図10



図11

けです。「されど其声のぶん／＼たるは文人の中にも入つべきもの也とうち笑ろふてやみぬ。」音だけはぶんぶんがやがやうるさいのは文人と同じだと、自分は文人の中で中心的な人物なのに自虐的なことが書いてあるのです。先ほどの蚊の図も単なる博物図ではなく、文人文化の遊びの中にある訳です。酒井抱一は、このような絵をいくつか残しています。少し前の時代に松平定信による寛政の改革の時に流行ったもので「世の中に蚊ほどの大きさものはなしぶんぶというて夜も寝られず」という狂歌がありますが、そのあたりが土台となって抱一の言葉に繋がるのではないかと思われます。

また、この時代の文化を示すものとしてこちらの作品を紹介させていただきます。この作品(図11)は、ほぼ全紙くらいの大きさですがが統(すべ)に書かれています。亀田鵬斎、酒井抱一、菊池五山、谷文一、谷文晁(谷文一の父)、雲室、市河寛斎(市河米庵の父)、市河米庵、中井敬義(酒井抱一の書の師)、春木南湖、まさに下谷周辺の文人の集大成です。亀田鵬斎の書を見ると良寛の影響を受けていることが分かります。また、中井敬義は、董其昌が好き過ぎて雅号を「董堂」とするくらい傾倒していました。

市河米庵 (いちかわべいあん) (1791~1858)

市河米庵は、入谷の界限で活躍した人です。太田蜀山人や酒井抱一と重なる人です。この作品は70歳代のもですが、亥年生まれですから、今年に生まれ年に当たります。今から二四〇年前の生まれです。亥年、亥日、亥刻に生まれたので三亥という名前です。米芾に私淑してこの雅号を付けたと言われています。この市河米庵も長崎へ行き、実際に清人と一緒に書画について語っています。また、長崎では書画会が盛んに開かれていました。この絵(図12)(京都国立博物館蔵)は60歳の寿像のために渡辺華山が描いた肖像画です。市河米庵は、小山林堂書画文房図録を編纂しましたが、題名にある小山林堂というのは、市河米庵の齋号(文房の名称)です。山林堂とは米芾の別号です。それに「小」を付けて小山林堂と名付けるほど、米芾に私淑していたことがわかります。また「陽谷園」とは、鶯谷のことを示し、鶯谷にある小山林堂というわけです。この図録は、市河米庵の数多く所蔵していたコレクション図録で、10冊の構成です。書画が一四一点、文房具等が一二一点が紹介されています。さらに明清の扇面の目録(作品不掲載)が二四〇種類紹介されています。実に五〇〇点以上の中国文物のコレクションを形成していた事を知ること



図12



とが出来ます。この図録は江戸時代で刊行された中で唯一個人のコレクションで、図が入っているのも特徴です。

また、市河米庵の邸宅、つまり小山林堂は、今の入谷駅前にありました。また、今の秋葉原駅から上野方面へ向かうすぐ右手当たりに市河寛齋、市河米庵父子の稽古場がありました。清水礪洲という市河米庵の弟子が記録を残しています。「余弱にして(若くして)書を米庵翁に学ぶ。先生業を盛にするの最初にて、下谷長者町と云より移りて、藤堂侯西門前羽倉外記の地面に大廈(複数階の大きな家)を营造し、四九の日(四と九のつく日)の会日に門人百人におよぶの出席なり。寛齋翁は隠居して二階住居にて、塾生門人等のために三家妙絶、放翁詩抄等の講義あり。」とあり、二階で市河寛齋が詩の講義を行い、一階で市河米庵が書の稽古をしていたようです。また、入谷の小山林堂のそばに八百善があり、さらにその近くに酒井抱一も住んでいました。当時、下谷文人と呼ばれるほど多くの文人が明治時代になるまで多く住んでいました。

小山林堂書画文房図録の中には、書の翻刻したものを具体的に掲載しています。これは明の董其昌が書いた自叙帖(図13)です。市河米庵は董其昌の自叙帖を持っていました。で、解説を付けて掲載しています。また、査嗣標(1615~1698、米芾・董其昌を

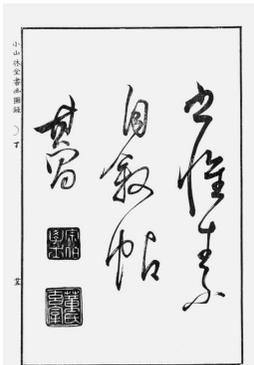
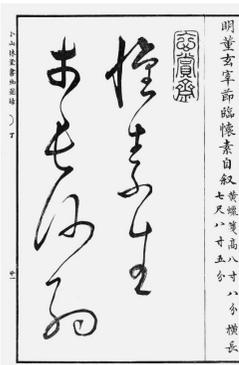


図13



学び「米董再来」と言われた文人)の書幅も掲載しています。特に落款印は小さくて見にくいいため、次のページで関防印や落款印を拡大して掲載しており、とにかく本物を紹介しようという強い思いを感じます。また程君房の墨なども表と裏面だけでなく、陽刻の側款までも紹介し、重さや大きさなども解説に書き入れています。このように小山林堂書画文房図録には、自分のコレクションを出来るだけリアルに人に伝えようという意志が感じられます。

### 実事求是の精神

ここまで見てくると、幕末の文人たちには、本物を見たい、真実を知りたいという思いから、自分で出来るだけ本物に肉薄したのを見たり、聞いたり、食べてみたいという強い思いがありました。ですから、これまでも紹介してきたように出来るだけリアルに人物画を描いたり、動物を描いたりしているのです。また、墨帖類でも渡来した淳化閣帖を日本で彫り直しています。(図14)このように当時は、法帖も多く出版され、今日で言う博物学が発達していきます。歴史資料、古文書、石碑、武器、出版物、遺跡、風景など歴史上生み出されたものをリアルに写し取り、そこから学問をスタートさせようという考え方が広がっていきます。これらは、今日の自然科学分野や歴史分野の研究に当てはまりませんが、当時の文人たちはこれらにも取り組み、かつ書や詩の世界でも活躍しており、両方を行き来しながら文化を創

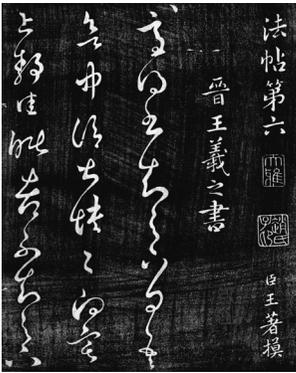


図14

っていきました。さらには、亀田鵬齋は儒学者の第一人者、市河米庵は漢学者、酒井抱一は殿様の弟、太田蜀山人は高級官僚です。公の場では席を共にすることはまずない人たちです。それが文人の世界では、一緒に卓を囲んで様々な話題で交流するわけです。このようにして、文化が交流し深まっていきました。

この絵(図15)は、寺子屋での幼童席書会の様子です。初天神(その年最初の天神を祀る神社の縁日)の時に自分が書いた書をみんなに披露しているところ。子どもたちは、6、7



図15

歳になると2月の初午の時に身分に関係なく、地域の寺子屋に入門します。江戸時代は封建制ですので身分の区別が非常に強いイメージがありますが、初期教育ではあらゆる階層の人たちが集まって学ぶ環境がありました。そこで書が上手な人、素読の上手な人など、それぞれの分野で序列が出来ていくのです。ですから身分に関係なく、秀でた子どもが指導者の立場になっていきます。このような文化が、文人文化の中で置き換わっているところがあります。当時は詩書画、器物(焼き物、ガラス)、飲食、音楽、服飾などありとあらゆる文化が清朝

から長崎へ渡り、そして京都へ伝わり、それらを学んだ人たちが江戸へやって来て、複層的に伝わっていきます。それらを有名にしていたのが当時の文人たちでした。メディアとしての役割を果たしていくことで、江戸の文化が豊かになっていったと言えます。この後、これらの文化がどのようなようになっていくか、次にお話をしていきたいと思えます。

### 文人趣味のゆくえ

この絵（図16）は、河鍋暁齋かわなべきょうさいが描いた明治初期の書画絵図です。ある料亭に書家や画家が大勢集まり、その場で作品制作を披露し、大勢の見物人も加わります。書は密室で書くものだけでなく、書いているところを見せる楽しさ、それを見たいという欲求もあるわけです。この時代は、内国勸業博覧会や万国博覧会など、博覧会が盛んに開催されましたが、やがて東京にも国立博物館や動物園が造られ、美術館や博物館等は全国に整備されていきます。展覧会は、作品は展示されていても、その書き手は会場にいるとは限りません。しかし、当時の文人たちは、それでは



図16

物足りず、そこで書いているところを鑑賞し、かつ、その作品を持ち帰りたいのです。ですから、博覧会場の傍でこのような席上揮毫が行われ、次第には博覧会場内で行われるようになりました。この図に戻りますが、これは河鍋暁齋が描いたと申しましたが、本人が描いたのは人間と作品の枠のみです。その中の文字は、書画会に集まった書家の直筆です。つまり、河鍋暁齋から文字だけ書かれていない絵を購入し、書画会の当日にそれぞれの書家を回って書いてもらうのです。要はサイン式の寄せ書きです。この絵の中には下谷界限に住む文人が多く登場しています。この図の一番下に「鳴鳳」と書かれています。また二十歳の西川春洞先生の書です。その後、明治三十年代に中国の書風を生かした骨格がしっかりした作品（図17）を書かれ、名実共に不動の立場になられていきます。

### 大規模展覧会の時代へ

このように江戸時代の文人たちが博物館や展覧会を盛んにした後、

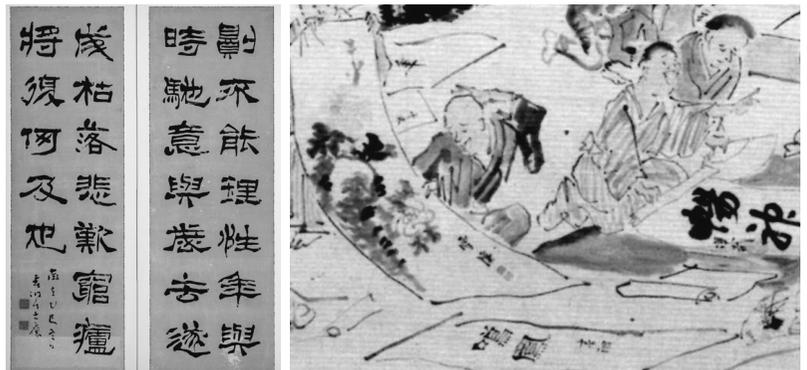


図17

その中で新しい書の世界を次の世代が創っていきます。

東京都美術館は大正15年に開館しましたが、この写真(図18)は昭和6年泰東書道院のメンバーの様子です。当時、これだけの人たちが出品していました。その中で中心的な存在だったのが西川春洞の弟子である豊道春海です。書において、文人文化の流れは、時代とともに展覧会で表現する社会へと移り、今日の展覧会文化を支えてきたわけです。

しかし、こうした展覧会文化はとても豊かになったのですが、今日の美術館制度や大学における美術教育の中では、この時代の書や文人文化は劣勢な立場にあり、展覧会文化における功績を積極的に残しているという姿勢がやや欠けている傾向にあります。つまり、国立近代美術館や各地の県立美術館、近代美術館で書の作品は余り収蔵されておらず、近現代の書文



図18

化が歴史として残されていない状況なのです。

### 成田山書道美術館の役割

成田山書道美術館(図19)は、現在約六千点位の作品を収蔵しており、拓本や印譜なども含めるとおそらく一万点近くのものがあります。中心は江戸時代、近代の書ですが、おそらく幕末以降の書を体系的に収蔵している所は、質量の上で他にないかと思われます。また、個々のコレクションもたくさんあり、田近憲三蒐集拓本、松井如流蒐集拓本、

古谷蒼韻作品および法帖文房具コレクション等も充実しています。また、近年では松崎春川、松崎中正コレクションの古筆と古写経が寄贈されました。平成時代以降のコレクションでは全国的にも最も大きな寄贈でした。個人のコレクションでも中野越南・松本芳翠・浅見喜舟・西谷卯木・今関脩竹・青



図19

山杉雨・千代倉桜舟・伊藤鳳雲・古谷蒼韻・松井如流・赤羽雲庭・徳野大空と本館で開催された展覧会を機に寄贈頂いたものも多くあります。本来でしたら、この先生たちの出身地にある美術館が蒐集しても良さそうなのですが、絵画は蒐集しても書は集めない傾向があります。原因は学芸員の不在、または展覧会が出来ない等が考えられます。

では、歴史から消えてしまっただけかと言ったらそうはいかないと思います。本館がこれらの作品を蒐集する理由として、他の美術館が収蔵しないため本館に集まっているという背景もあります。私たちとしては、嬉しい反面、この状況に危機感も募らせています。このままですと本日お話をしてきました江戸の文化が消えてしまうのではないかと恐れを本当に感じているのです。本館が収蔵しているもので、近衛信尹「連歌巻」、北島雪山「詩書巻」、日下部鳴鶴「龍峽勝概」、赤羽雲庭「凜巖」、青山杉雨「書鬼」、文化人では川端康成「有由有縁」、拓本では松井如流旧蔵「鄭羲下碑」、そして松崎コレクションの古筆と古写経など、どれも白眉の一点と言って良いものが多くあります。

成田山書道美術館の役割は、これまでも申し上げて参りましたが、江戸時代に発した文人の営みがとても豊かでありながら、今日忘れがちになっているところを守り続けることだと思っています。私たちが学校や美術館で収蔵品を紹介する機会が多いのですが、ともすると有名なものや評価が確定したものを紹介しがちになります。しかし、一方で今うかうかしていると消えていってしまう文化もあるかと思うのです。それらをきちんと理解し、纏めて収蔵していくことが私たちの使命だと感じています。

これをもちまして本日のお話をおしまいにしたいと思います。ご静聴ありがとうございます。

### 主な解説

#### ※1 卓袱料理

中国風の食事様式を取り入れた長崎の名物料理。卓袱はテーブルクロスを意味する唐音。一つのテーブルを囲んで、大きな大皿に盛った料理を各自が小皿に取り分けて食べる様式を取る。中国から伝わった同様の形式で普茶料理が精進であるのに対して、肉類や魚介を用いているのが特徴である。

#### ※2 黄檗山萬福寺

京都府宇治市にある黄檗宗の大本山。1661年（寛文元）年に隠元のために徳川家綱が宇治に建立した寺。明の風を模した寺域は特異なもので、山門、天王殿、仏殿、法堂が一直線に並び、それを中心として左右に諸堂を配置している。寺号を黄檗山とし、代々中国から来た僧が住持した。1740（元文5）年、第14世龍統が日本人として初の住職となった。

#### ◎成田山新勝寺

千葉県成田市成田にある真言宗智山派の仏教寺院。本尊は不動明王（弘法大師自ら敬刻開眼）。公益法人成田山文化財団を設立し、成田山書道美術館、成田山靈光館（郷土博物館）、成田山仏教図書館（公共図書館）を運営している。

## 第60回記念太玄会書展

### 謝 辞

本日は、ご多忙の中、このような厳粛にして盛大な表彰式を挙  
行して頂き、誠にありがとうございます。

この度は、歴史と伝統のある太玄会書展の第六十回記念の年に  
栄えある賞を賜り誠に光栄なこととお礼申し上げます。

これも偏に本日ご臨席の諸先生方のおかげと深く感謝申し上げ  
ます。

今まで、長く書道を続け情熱を燃やして参りましたが、その間、  
書の奥深さや美の尊さを知ることが出来、大変幸せなことと思っ  
ております。

こうしたことは、これまでご指導下さいました先生のお陰と深  
く感謝しているところであり、重ねて厚く御礼申し上げます次第で  
ございます。

今日の受賞を励みに尚一層研鑽努力してまいりたく思いますの  
で、今後共変わらぬご指導を賜りますようお願い申し上げます。

終わりに、太玄会の益々のご発展と先生方のご多様をお祈り申  
し上げお礼の言葉といたします。

誠にありがとうございました。

平成三十一年一月二十日

受賞者代表 九龍社 藤 岡 悠 苑



授賞式風景



謝辞 藤岡悠苑氏



授賞式風景



# 令和元年度 総会

日時 平成31年4月21日(日) 16時開始  
会場 上野精養軒  
(司会・伊場英白)

## 次第

- 一 定足数の確認 (713) 出席115名 (委任状525名)
- 一 開会の辞 (宮負丁香)
- 一 常任顧問挨拶 (田中鳳柳)
- 一 会長挨拶 (垣内楊石)
- 一 議長選出 (笠原聖雲)
- 一 書記任命 (三根揚輝・露野祐涯)
- 一 議事
- (1) 平成30年度 事業報告 (金丸鬼山)
- (2) 平成30年度 決算報告、会計監査報告 (下谷蘊雪・高橋心行)
- (3) 令和元年度 事業計画案について (金丸鬼山)
- (4) 令和元年度 予算案について (下谷蘊雪)
- (5) 新役員の紹介(理事・実行委員 理事) (金丸鬼山)
- (6) その他
- 一 書記退任
- 一 議長退任
- 一 閉会の辞 (大場大幹)

# 平成30年度 事業報告書

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
30・4・15	運営委員会・理事会 平成30年定期総会 懇親会	総会関係事項の確認 事業報告・会計決算報告 事業計画案・予算案審議 その他	上野精養軒
5・16	運営委員会	第60回記念太玄会書展関係 その他(第3回学生選抜展特別講演会) 創立60周年記念祝賀会等 実行委員会設立	上野精養軒
6・13	実行委員会(第1回) 事務局、部長合同会議	創立60周年記念事業について 第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展関係) その他	上野精養軒
7・11	運営委員会	第60回記念太玄会書展関係 その他(第3回学生選抜展特別講演会) 創立60周年記念事業について	上野精養軒
10・10	事務局、部長合同会議	第60回記念太玄会書展に向けて (併催第3回学生選抜展関係) 各部進捗状況報告 企画詳細の確認	上野精養軒
12・2	搬出内部 運営委員会 理事会	書類搬入 第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展関係) 忘年懇親会	上野精養軒
31・1・6	第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展)	搬入 審査(会員賞選考) 審査(準会員・公募) 高橋利郎先生による特別講演会 (1/24) 特別展示作品(21点) 席上揮毫・解説会・ビデオ放映 授賞式・祝賀会	東京都美術館
1・20	第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展)	創立60周年記念事業 第60回記念太玄会書展 (併催第3回学生選抜展) 反省会	上野精養軒
3・16	実行委員会(第2回) 事務局、部長会議	第61回太玄会書展に向けて 事務局編成について	上野精養軒
4・3	会計監査		東武ホテルバント東京
4・21	運営委員会 運営委員会・理事会 令和元年度定期総会	役員改選人事の確認 事業報告・決算報告 事業計画案・予算案審議 その他・懇親会	上野精養軒

## 第60回記念太玄会書展併催第3回学生選抜展 出品状況

☆総出品点数 1,287点

21	名誉顧問 常任顧問 董事 運営委員
9	総理事 事務理事 実理事
61	理事 執行理事 員
112	理事 審査員
127	査員
109	員
210	準会員 公
238	募学
400	生

## 第60回記念太玄会書展入賞状況

10	記念賞
8	太玄大賞
8	太玄賞
8	全日本書道連盟賞
7	特別賞
12	奨励賞
15	会員 新人賞
30	推選
64	準推選
38	特選
83	準特選
117	入選
400	学生部 入選

※入場者数 4,223名

## 事務局各部活動状況報告

### ◎事務局

(担当 副事務局長 伊東玲翠 江原見山 伊場英白 小出聖州)

4 定期総会実施

6 平成30年度会員名簿発行、創立60周年記念事業実行委員会の設立、会議の実施

7 第60回記念太玄会書展実施に向けての打ち合わせ

10 創立60周年記念事業について検討

運営委員会、理事会、忘年懇親会への通知

5～11 第60回記念展会場での新・旧役員の揮毫ビデオ放映の為、現執行部のビデオ撮影を実施

11 牧野商会、美風会への第60回記念太玄会書展の依頼

12 本展会場打合せ 当番総括 総会会場打ち合わせ

31 1 第60回記念太玄会書展開催 高橋利郎先生に依る講演会実施  
及び特別展示作品の設定

2 平成31年度定期総会のお知らせ

3 第60回記念太玄会書展来場者(各会来賓、その他) 礼状及び  
図録送付

※年間に開催される運営委員会、理事会、部長会、総会等会議  
の連絡事務

※報道関係(本展作品)(年鑑、広告)掲載に関する業務

※住所変更、退会届等 受付処理業務

※東京都美術館平成29年度公募団体展展示室の借館に伴う、書  
展実施年度の詳細打合わせ等

申請書の作成、提出、承認

(平成29年4月～令和4年3月)の5年間 太玄会32会期 1  
月19日～1月26日

### ◎会計部 (担当 下谷蘊雪)

30 4 平成29年度の会計監査に向けて仕訳帳等の整理準備

総会に向けて平成29年度の決算書、並びに平成30年度の予算案作成

平成29年度会計監査実施

平成30年度総会 決算書、予算案報告、総会受付補助

各社中へ平成30年度会費納入に関する書類並びに依頼書を送付

6 平成30年度納入会費の整理入力、領収書作成依頼

7 会費領収書を各社中へ送付

10 第60回記念太玄会書展に關して各部の行動予定の把握 行動

費、経費の算出、資金の準備

第60回記念太玄会書展書類搬入時の準備

12 第60回記念太玄会書展の予算案作成、運営委員会に提示

平成30年度理事会忘年会 会費納入受付 公募出品料集計

確認

第60回記念太玄会書展必要経費準備

31 1 第60回記念太玄会書展審査会に於ける手当及び経費支払業務

第60回記念太玄会書展授賞式、授賞懇親会の諸経費準備、支

払業務

2 第60回記念太玄会書展の収支報告書作成

3 平成30年度会計監査に向けて元帳、仕訳帳の入力整理

平成30年度決算書、平成31年度予算案作成

平成31年度総会準備

◎事業部 (担当 落野祐涯)

30 5 アオキに会員名札・賞札を発注

6 風雅ブランニングへ出品規定など依頼、各社中へ初出品票など発送

7 風雅ブランニングへポスター・ハガキなど全書類に關して送る、校正

8 真仙会・九龍社・鳥跡会三社中の会員名札、及び役職札、

事務用品などの確認と整理 入選賞状を注文

風雅ブランニングより出品規定・出品票届く

9 初出品票・出品規定・出品票を各社中及び個人宛に発送

10 風雅ブランニングから各社中、各業者へ書類発送 杉本先生に賞状発送

表具店へ側表の張り方確認

31 1 東京都美術館に備品搬入、各社中の役職札の手配

備品の整理

賞札の整理

精養軒に賞状、褒賞部依頼品など搬入

年間を通じて封筒は各先生の依頼により郵送

◎広報部 (担当 荒井湧山)

30 4 定期総会(録画、撮影)

9 事務局会議

部長会にて会報第75号の構成計画を報告 於…上野精養軒

9～11 会報第75号の編集

原稿依頼

(会長) 垣内楊石先生(理事長) 露野雅宣先生(事務局長)

金丸鬼山先生

(特集) 高山爽快先生(書星)、清水美代子先生(真仙)、須

田瑞兆先生(研友)、大森鳳城先生(書人)

(各社中イベント紹介) 各団体事務局担当等、編集作業

30 12 理事会、忘年会 写真撮影等 於…上野精養軒

31 1 第60回記念太玄会書展 写真撮影、録画(審査、会場風景、

記念講演、授賞式、祝賀会) 於…東京都美術館

会報の編集作業、原稿を風雅プランニングへ依頼

7 会報の校正

8 会報第75号発行、各社中へ発送

◎渉外接待部 (担当 石井蕙園)

30 11 第60回記念太玄会書展 懇親会招待状の文面作製、風雅プラ

ンニングに印刷依頼

12 住所シール作成、案内状発送、懇親会招待状の発送

懇親会に御招待しない友好団体、報道関係への挨拶状を作成、

発送

31 1 懇親会への出欠席の最終確認を取り、席次表、席札、もぎりの

作成

席次表、席札の設置を精養軒に依頼

懇親会来賓者の受付

東京都美術館講堂に於ける特別講演会の受付

◎図録部 (担当 伊藤慈恩)

第60回記念太玄会書展作品集

30 6 記念図録に係わる基本方針の作成

10 記念図録に係わる詳細方針の決定

31 1 作品撮影 497点 風雅プランニング

(審査会員以上330、会員受賞者35、準会員受賞者94、公募受賞者38)

編集 記念図録担当及び風雅プランニング

2 一回目、二回目の校正

発行部数と発送先の確認

図録発行 各社中事務担当者宛発送 風雅プランニング

◎搬入出部 (担当 山口香葉)

30 10 書類搬入案内書を社中事務担当者に発送

(会計部より受領の払込取扱票同封)

招集通知書を搬入出部に発送

(書類搬入日・作品搬入日の事務作業の説明書)

12 書類搬入日 事務の実施

書類搬入の受付

社中持参の出品目録等の書類集約

社中別出品者数表の全体表作成

出品者数を理事会にて報告

受付書類を担当部長に引き継ぐ

31 1 作品搬入日 事務の実施

作品搬入の受付

搬入数の確認・確定（表装店8社より持ち込み）

役職別・社中別数の確認（社中別出品者数表参照）

出品目録・資格別作品出品数表・社中別出品数表の確定

事務局長に報告後、審査事務部長に引き継ぐ

1 作品搬出日 立会の実施

作品搬出の受付

搬出数の確認・立会（表装店8社の引き取り）

◎審査事務部（担当 山村鳳羽）

30 12 第60回記念太玄会書展の書類搬入確認（12／2）

・審査事務部処理について打ち合わせ

31 1 第60回記念太玄会書展審査事務部打ち合わせ役割分担説明（1／6）

・審査手順、作品配置、成績処理について打ち合わせ

・作品 887点確認 ・作品配置

・審査場作成 ・出品者目録校正

・（入賞・入選者）通知ハガキ準備

・審査方法打ち合わせ、役割分担確認（1／8）

・風雅プランニングと打ち合わせ

・会員賞選考委員による審査

会員新人賞の選考審査

特別賞、奨励賞の選考審査

太玄賞、全日本書道連盟賞の選考審査

太玄大賞の選考審査

記念賞の選考審査

入賞者代表謝辞選出

・選考委員及び当番審査員による審査（1／9）

推選、準推選、特選、準特選、入選の選考審査

・選考委員及び当番審査員集合写真撮影

・当番審査員による（入賞・入選者）通知ハガキ作成、発送

・作品管理、成績名簿作成

・褒賞部へ連絡

◎陳列部（担当 大場大幹）

30 10 各社中に陳列人員名簿の依頼書類を送付

31 12 搬出入部より社中別出品者名簿と準会員、公募の名札を受け

取り出品数の確認

牧野商會に出品点数（887点）を連絡し見積もりを依頼

各社中の準会員、公募名札の確認

陳列原案を作成

31 1 副部長、委員に書類を送付

搬入日 牧野商會担当者と打ち合わせ 準会員、公募作品と

名札の確認

副部長と打ち合わせ 会場の確認

陳列日 総人数62名、15時終了

初日 9時より副部長と名札、賞状等の再確認

最終日 14時半終了、名札などの取り外しと整理

◎褒賞部 (担当 小泉興起)

30 12 精養軒担当者との打ち合わせ (12/2)

副部長との打ち合わせ (12/2)

委員に日程表を配る (12/2)

書類の作成・整理・確認

リボン・事務用品の確認と補充

松下徽章へ賞品のメダル発注

賞状入れの筒発注

額 (記念賞・太玄大賞分) 購入

事業部へ賞状の発送依頼 (揮毫者宛)

31 1 審査終了後、各社中へ受賞代表者申告用紙を配布、集約 (1/9)

呼名簿の依頼 (1/9)

代表者名簿の作成

式次第を精養軒に依頼 (1/9)

賞状の揮毫、確認

会場案内図・席次表作成

賞状・賞品等各社中へ発送 (1/20)

会場設営 (1/20)

授賞式運営 (1/20)

◎祝賀会部 (担当 大河原由佳)

30. 11 各社中の事務担当者に依頼書 (祝賀会出席者希望数・リボン  
送付先住所氏名)

会費振込用紙を送付 (11/13)

全員着席形式、追加当日受付ありで行う

精養軒と打ち合わせ (11/12)

当日までの準備

31 12

1 1 出席人数把握 ・看板 (舞台上の確認) ・次第の確認

・書類作成 ・リボン確認 ・案内表示作成

委員に書類送付 (1/3)

各社中に出席者数リボンを指定先に送付 (1/13)

精養軒と最終打ち合わせ (1/15)

1月20日

15時00分 部長・副部長・委員集合、打ち合わせ

15時30分 仕事準備

16時00分 当日受付開始

17時40分 会員入場

17時55分 来賓入場、祝賀会開会

19時30分 祝賀会閉会、退場

19時40分 終了

出席者数

申込み 238名

来賓 19名

追加当日申込み 42名

合計 299名

◎学生部 (担当 鳥越新芽)

30 9 第3回学生選抜展出品要項他書類を13社中宛発送

12 書類搬入、出品一覧表、表具料振込コピー受付

学年別出品点数確認

高(39点)、中(114点)、小・幼(247点) 計400点(前回398点)

風雅プランニングに入選者名一覧の発注(150部)

31 1 搬入日 作品点数確認

陳列日 学年別に三段掛けて展示 23・24室使用

証発送 各社中宛入選証、入選者名一覧仕分け

発送は褒賞部に依頼

最終日 15時より軸をおろす

※第3回学生選抜展出品者数 400点(前回398点)

令和元年度 事業計画表

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
平成31年4月21日	運営委員会 運営委員会・理事会	役員改選の確認 総会関係・第61回太女会書展 (併催第4回学生選抜展) 当番審査員決定方法・日程 その他の確認 事業報告・会計決算報告 事業計画・予算案審議・その他 懇親会	上野精養軒
平成31年5月8日	事務局・部長会議	創立60周年記念祝賀会最終確認等 第61回太女会書展 (併催第4回学生選抜展) その他(特別講演会等)	上野精養軒
平成31年6月9日	太女会創立60周年記念事業 実行委員会	太女会創立60周年記念祝賀会 (併催第4回学生選抜展関係) その他	ザ・フリンスパーク タワー東京
平成31年7月10日	運営委員会 事務局・部長会議	第61回太女会書展 (併催第4回学生選抜展関係) その他	上野精養軒
平成31年10月9日	事務局・部長会議 運営委員会 理事会	書類搬入 第61回太女会書展 (併催第4回学生選抜展関係) 忘年懇親会	上野精養軒
平成31年12月1日	搬入日 理事会	搬入 審査(会員賞選考) 陳列 (準会員・公募)	上野精養軒
平成31年1月5日	第61回太女会書展 (併催第4回学生選抜展) 9月21日/17日/26日 (席上揮毫)	審査(準会員・公募) 陳列 初日 授賞式・祝賀会 最終日	東京都美術館
平成31年1月7日	講演会吉澤鐵之先生(予定)		東京都美術館
平成31年1月19日	講義会		東京都美術館
平成31年1月21日	講義会		東京都美術館
平成31年1月26日	講義会		東京都美術館
平成31年3月14日	事務局・部長会議	第61回太女会書展 (併催第4回学生選抜展) 反省会 その他	上野精養軒
平成31年4月上旬	会計監査	事業報告・決算報告 事業計画案・予算案審議・その他 懇親会	上野精養軒
令和2年度4月19日	運営委員会・理事会 令和2年度定期総会		上野精養軒

# 令和元年度 役員構成

名誉顧問	梅原 清山			
常任顧問	福田 丞洲	田中 鳳柳	笠原 聖雲	
会長	垣内 楊石			
副会長	石川 流芳	西村 東軒	落野 雅宣	
董事	鈴木 暎華	瀧沢 曲峰	小原 天簫	
	伊東 玲翠			
理事長	宮負 丁香			
副理事長	金丸 鬼山	伊場 英白		
事務局長	小出 聖州			
副事務局長	江原 見山	大場 大幹	下谷 蕪雪	
	飛田 冲曠			
運営委員	垣内 楊石	石川 流芳	西村 東軒	
	落野 雅宣	鈴木 暎華	瀧沢 曲峰	
	小原 天簫	伊東 玲翠	宮負 丁香	
	金丸 鬼山	伊場 英白	小出 聖州	
	江原 見山	大場 大幹	下谷 蕪雪	
	飛田 冲曠	海野 十方		

理事・総務	石島 廻山	遠藤 有翠	木全 珠香
	植木 蒼穹	鎌田 龍祥	中尾 勝子
監事	高橋 心行	中田 珪川	
理事・実行委員	足達紫鳳	新井清玉	荒井湧山 石井蕙園
	石井香村	石井珠翠	石坂翔鳳 伊藤紫香
	伊藤慈恩	菴澤幸楓	大河原由佳 大木秘翠
	大窪昇鶴	大森鳳城	笠井津仙 片倉道子
	亀ヶ谷深翠	川端敏江	倉持栄秋 黒川白嶺
	黒田桂泉	小池鱗華	小泉興起 小林紫雲
	小林碧桃	近藤寿泉	佐々木恵陽 佐々木幸葉
	佐藤龍聖	嶋田白染	清水美代子 志村恵風
	須田瑞兆	返町恵風	高山爽快 滝澤聖華
	田村昇鶴	柘植金鶏	富山虎跑 鳥越新芽
	中元泰乘	並木金紫	南部碧章 西澤厚子
	西谷香峰	橋本春溪	長谷川溪華 長谷川香濤
	稗田影風	落野祐涯	吹原草扇 細谷芳月
	堀越壽崑	前川郷石	増田山鄩 増永楊蘭
	三上彩風	南 溪石	三根揚輝 村松風襟

理事

山内浪華	山口香葉	山村鳳羽	山本白鷗
青木芳濤	浅香麗芳	池田紅華	石黒自耕
板垣芳蘭	板倉建昇	伊藤桐花	伊藤遙山
岩井壹龍	宇野静香	馬居李帆	浦田楊月
遠藤鈴響	大木暁峰	大竹伯燿	太田芳琴
大畑晃翠	岡崎翠晃	小野敏之	垣内玉華
柏原桂雪	勝又慶竹	加藤径石	嘉門瑤泉
川上白鳳	川谷淳子	川本景月	菊野白濤
久保田芳仙	倉田桂華	栗田伯陽	黒川虚白
小堀蘚穂	小宮柳岱	小和田恵風	佐藤北峰
下島東僊	下原春美	下村清子	末永照英
杉浦華英	杉本英華	杉本雅峰	鈴木恵理
関根暁香	高橋興舉	高橋心華	田上洋香
宝田暁蓮	竹内游月	田中盛観	田辺心苑
田村麦浪	段野裕子	坪川九翠	徳水みゃ子
内藤秋麗	中垣郁芳	中西甫子	中森茶月
西澤翠香	新田白楊	長谷川流祥	花澤雙鴻
林 幸恵	林 韶舞	林 賢子	原田彩翠
弘田長風	露野研涯	福田節子	古谷善子

第60回記念太玄会書展  
入賞または社中の推選による昇格者

第60回太玄会書展入賞による理事・実行委員へ8名

會田春燕 植村暁香 小山泰雲 笹井芝雪 清宮白鷺 田中恵康  
 藤岡悠苑 山崎翠嵐  
 社中の推薦により理事・実行委員に昇格された方3名

小泉香園 田中柳暉 宮島吾風

第60回太玄会書展入賞による理事へ16名

石井滯翠 市川志玉 江原紫光 川津恵鮮 小林嶺風 小山君代

星野遙涯 細田耕仙 堀 桃泉 真岸京湖  
 松尾蘭月 松田爽花 松橋多恵 御園生溪鳳  
 三岡翠風 皆川蘭香 蓑 青松 宮原真玄  
 宮本芳秀 三好凌香 望月俊邦 山内紀隆  
 山口杏園 山崎寛齋 山崎琇園 山崎洋子  
 山下玉水 山田光倫 山田騰沸 山本皓月  
 湯浅瑞雲 横山恵華 吉田景雲 吉田恵子  
 渡部越愁 渡辺玲雲

齋藤清華 鈴木春暉 田中華苑 西岡虹舟 羽山多望 本間杏雪

松口翠葉 村上航舟 山地暎翠 吉村清志

社中の推薦により理事に昇格された方8名

石井瑗泉 伊藤氣雪 伊藤紫粹 小田堤翠 窪田好華 白崎信園

藤田冠山 山口古艸

審査会員へ13名

大須賀竹仙 垣内楊玄 北村如雲 鈴木竹園 鈴木夢雅 高橋英峰

塚田恵子 寺澤紀芳 時田大祥 濱田桂香 二木真木 山上玉僊

脇本大幹

会員へ21名

石原成雅 板垣仙露 大木操守 小野凌水 川井韶瑞 菊地将太郎

小松秋香 佐藤小暉 島村有酔 高橋玉泉 田島由美子

遠矢虚園 富本琇瑩 細萱玲風 町野鮮萌 松井芙蓉 宮本恵元

宮本翠邦 村山霜紅 家中麗醉 山形翠簫

準会員へ25名

石井起和 石川愷楓 市川嘉恵 井上紀秀 岩淵福仙 浦崎沁雅

大野青霞 岡野ひろみ 神田絹香 久保田溪堂

児山九聲 後藤詩織 後藤爽紀 莊保浩子 鈴木早秀 竹中光順

根本恵和 福岡華泉 福本明暢 藤永真里 古川紫虹 松丸流雲

松本娟秀 山本紫香 渡辺佳祥

令和元年 事務局構成

事務局長 小出聖州

副事務局長 江原見山 大場大幹

会計部 下谷蕪雪 飛田冲曠

事業部 露野祐涯

広報部 荒井湧山

渉外接待部 石井蕙園

図録部 小林碧桃

搬出入部 山口香葉

審査事務部 山村鳳羽

陳列部 伊藤慈恩

褒賞部 小泉興起

祝賀会部 大河原由佳

学生会部 鳥越新芽

# 令和元年度 総会・懇親会風景

平成31年4月21日(日)16時開始 会場：上野精養軒

## 総会風景



挨拶 田中鳳柳常任顧問



開会の辞 宮負丁香理事長



垣内楊石会長



司会 伊場英白副理事長



閉会の辞 大場大幹副事務局長



議長 笠原聖運常任顧問



総会風景



総会風景

## 懇親会風景



乾杯 田中鳳柳常任顧問



挨拶 宮負丁香理事長



開会の辞 西村東軒副会長



司会進行 小出聖州事務局長



懇親会風景



閉会の辞 石川流芳副会長



理事昇格者紹介



理事実行委員昇格者紹介

# 創立60周年記念祝賀会風景

令和元年6月9日(日) 会場：ザ・プリンスタワー東京 コンベンションホール



清興 津軽三味線



受付風景



垣内楊石会長 挨拶



笠原聖雲常任顧問 挨拶



開会の挨拶 宮負丁香理事長



乾杯発声 日展理事新井光風先生



全国書美術振興会会長田中壯一郎氏挨拶代読 同理事長 高木聖雨先生



祝賀会風景



祝賀会風景



祝賀会風景



祝賀会風景



司会 飛田冲曠副事務局長



閉会の挨拶 石川流芳副会長



名誉顧問梅原清山先生挨拶代読 西村東軒副会長

# 創立60周年記念祝賀会 ご来賓一覧

(株)近代書道研究所代表取締役 青山 慶示様

毎日書道会

赤平 泰処様

日展理事

新井 光風様

日展会員

有岡 郊崖様

日本書学院代表

井垣 清明様

(株)芸術新聞社

石山 知明様

日展会員

一色 白泉様

岐阜女子大学特任教授

伊藤 滋様

毎日書道会

稲村 龍谷様

日展会員

井上 清雅様

日展会員

牛窪 梧十様

日展会員

遠藤 彊様

日展会員

大澤 城山様

書法漢学研究会理事長

大野 修作様

(株)書道新聞社

大原 晋士様

産経国際書会

風岡 五城様

出光美術館学芸課長

笠嶋 忠幸様

産経国際書会

勝田 晃拓様

(株)ビジョン企画出版社

金子寿美子様

毎日書道会

金子 大藏様

回瀾書道会副代表

川嶋 毛古様

驥山館館長

川村 龍洲様

(株)修美社

菊池 芳輝様

毎日書道会

(株)美術新聞社

産経国際書会事務局長

(株)風雅プランニング

産経国際書会

(公財)全国書美術振興会  
事務局長

(株)佐久間太熙堂

(株)匠出版

日展会員

日展会員

日展理事

謙慎書道会理事長

産経国際書会

大東文化大学教授

(公財)全国書美術振興会  
会長

日展準会員

日展会員

書道文化研究家

(一財)毎日書道会  
専務理事

大東文化大学名誉教授

鬼頭 墨峻様

國枝 貴之様

衆 雅人様

小久 壽夫様

齋藤 香坡様

坂本 敏史様

佐久間基晴様

澤田 博史様

師田 久子様

関 吾心様

高木 聖雨様

高橋 照弘様

高橋 利郎様

田中壮一郎様

歳森 芳樹様

永守 蒼穹様

西嶋 慎一様

西村 修一様

萩庭 勇様

読売書法会事務局長

(株)ビジョン企画出版社

(株)藤樹社

毎日書道会

東京国立博物館名誉会員

日展理事

(公社)全日本書道連盟  
理事長

(株)書道芸術社

全日本美術新聞社

毎日書道会

(公社)創玄書道会理事長

毎日書道会

産経国際書会

(株)美術年鑑社

日展会員

日展準会員

日展会員

日展会員

日展会員

日展会員

日展会員

畑 正之様

福岡 曉良様

藤崎 敦司様

船本 芳雲様

古谷 稔様

星 弘道様

細野 誠様

松原 清様

水川 舟芳様

室井 玄聳様

柳 碧鮮様

山中 翠谷様

山本 晴城様

油井 一人様

吉川美恵子様

吉澤 石琥様

吉澤 大淳様

吉澤 鐵之様

綿引 滔天様

和中 簡堂様

## 創立60周年記念祝賀会祝辞・謝辞

### 創立60周年記念祝賀会の開催

令和元年6月9日(日)、ザ・プリンスパークタワー東京コンベンションホールにて創立60周年記念祝賀会が華やかに開催された。会に先駆け、山下靖喬氏による津軽三味線の演奏が会場全体に響き渡り、参加者の心を和やかにかつ厳かな気分へと誘った。

飛田冲曠副事務局長の司会進行のもと、宮貞丁香理事長の開会の辞に続き、笠原聖雲常任顧問による実行委員長挨拶、垣内楊石会長の挨拶へと続いた。来賓挨拶では、全国書美術振興会代表理事会長の田中壮一郎様の代理として、同代表理事理事長高木聖雨様が代読を務めた。また、太玄会からは梅原清山名誉顧問先生の挨拶を副会長の西村東軒氏が代読を務め、主催者からこの日参列された多くのご来賓へ感謝とお礼の言葉を述べられた。また、太玄会創立当時の様子や、梅原先生と太玄会との出会いを通して、60年間という時の流れを振り返った。

続いて、日展理事の新井光風先生による乾杯の発声を頂き、華やかに祝宴がスタートした。会場内は終始穏やかな歓談に包まれた。

この日は、62名のご来賓を迎える中、太玄会から300名を超える役員及び会員が参加し、お互いの交流を深め、絆を確かめた。終始和やかな祝宴もあつという間に時が流れ、石川流芳副会長の閉会の辞とともにご来賓をお見送りし、宴はお開きとなった。

書聖王羲之の蘭亭序にもある通り、宴がどんなに素晴らしく参列者の心を射止めても、それを言葉にすることは叶わない。一人一人が、

この日に感じたことを今後の書に表すことこそ私たちの使命と感じた太玄会還暦の一日だった。

ここに当日の祝賀会でご挨拶を頂いた諸氏の言葉を記させて頂いた。

### ◎実行委員長挨拶

太玄会常任顧問 笠原聖雲

本日の祝賀会に当り、ご来賓の先生方には公私ご多用のところご来臨をいただき、また会員の皆様にも出席を頂きまして有難うございました。実行委員会を代表して厚く御礼申し上げます。

本会は本年一月、平成三十一年という記憶に残る年に、第六十回記念太玄会書展を開催し、太玄六十年の歴史に一つの区切とすることが出来ました。この間、皆様からたくさんのご指導とご厚情をいただきました。また、先輩の先生方には、十五社中の独自性を尊重しながら、会の存続発展にご尽力を頂きました。ここに合わせて深く感謝の意を表させていただきます。

実は当初は、この祝賀会が改元の年になろうとは思いませんでしたが、今日ここに、新元号「令和」のもとでこの日を迎える事ができましたのは、六十年の歴史を経て、次なる第一歩を進める太玄にとって、誠にふさわしい記念の日となったと思います。私達は、この祝賀会を機に、伝統をふまえ、新たな出発点として、会員相互協力のもとに若い活力の充実と次世代の育成を計り、尚一層の研鑽を重ねる所存でございます。

甚だ僣越ではございますが、本日のご来賓を始め多くの書道界の先生方から、今後も今までに増してのご指導ご鞭撻を頂きたくお願い申し上げます。

本日は誠に粗宴ではございますが、お時間の許すかぎりご歓談いただけましたら幸いです。

結びに、ご列席の皆様のご多幸ご健勝をお祈りいたしまして私のご挨拶といたします。

### ◎ 会長挨拶

太玄会会長 垣内 楊石

本日は、ご来賓の先生方にはたいへんご多用のところご臨席を賜り、また会員の皆様も多数ご出席をいただきましたこと、心から篤く御礼を申し上げます。

「平成」も幕を閉じ、新しい元号の「令和」の幕開けとなったこの年に、私たちの太玄会は、創立60周年という記念すべき節目を迎えました。奇遇にも、令和の時代と期を一にした感じがございます。太玄会がこれまで歴史を刻み、また伝統を築き上げられたことは、本日ご臨席いただきましたご来賓の先生方の温かいご支援、また会員の皆様のご協力のお陰と、心から感謝を申し上げます。

この機会に、太玄会、また書道界がいかに歩を進めていくべきか、思いを馳せてみますと、大きな新しい変革というものは求めようもありませんし、私はその必要はないとも思っております。ですが、大切なことは、書道が日本の伝統的、国民的芸術である、ということことです。

こうした書道の理念を守り続け、そしてこよなく書を愛し、日本の心を大切にして、私たちは歩みを進めていかなければならないと、意を決する次第でございます。

本日はささやかな記念の催しではございますが、皆さまどうか有義に時を過ごされ、また楽しくご歓談いただき、この歴史的な日が素晴らしい思い出となりますことを、心から念願しております。たいへん簡単ではございますが、お礼の意を込めまして、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

### ◎ 来賓挨拶

全国書美術振興会 代表理事会長 田中壮一郎様  
(代読)全国書美術振興会 代表理事理事長 高木聖雨様

失礼いたします。高木聖雨でございます。全国書美術振興会は、昨年末より会長に田中壮一郎先生にご就任頂きました。先生は、文部科学省の文部科学審議官、国立青少年教育振興機構の理事長を経て、現在の顧問をしておられます。本日ご出席の予定でしたが、残念ながら所用により出席することが叶わなくなりました。先生より、祝辞をあらかじめ参りましたので、代読させていただきます。

このたび、太玄会が創立六十周年を迎えられましたこと、誠にありがとうございます。赤羽雲庭先生をはじめとする多くの先人達が会派を超えて集い、つくりあげられた伝統ある会を、この六十年間、書の研鑽を積み、維持されたことに敬意を表します。

今後とも日本の書道という我が国の伝統文化の発展のため、引き続きご尽力下さいますようお願い申し上げます。

さて近年、書道界の多くの運動になっています二つの協議会は、図らずも私が会長を仰せつかりましたが、いずれも地道な活動を続けております。

「書写・書道教育の充実を」という運動では、学習指導要領改定案に、小学校低学年「水書（すいしょ）」ですが、毛筆教育が取り入れられる事になりました。教員向けにその研修会を実施しております。

「日本の書道文化をユネスコの無形文化遺産に」という運動では、文化庁の姿勢が、国指定文化財だけでなく、書道や茶道などの生活文化にも向き、教育の面で伝統文化としての書き初めにも、目を向け始めております。息の長い運動になると思います。どちらも引き続き、皆様方のご支援と、ご協力をお願いいたします。

あらためまして、太玄会の創立六十周年、誠におめでとうございませす。ますますのご発展をお祈りしてご挨拶いたします。

## ◎謝 辞

太玄会名誉顧問 梅原 清山  
(代読)太玄会副会長 西村 東軒

本日は私共、太玄会創立六十周年記念祝賀会に際しまして、各会代表の先生方また、日頃太玄会に関係くださって居られるご来賓様方、ご多用の中を大勢様お越し頂きまして感謝の至りでございます。誠に有難うございます。

本来、私自身直接お目にかかり、御礼申し上げなければなりません。が、九十七歳という年齢になりますと、外出は最大の苦手となり、御無礼誠に申し訳ございません。

さて、私共、この太玄会は昭和三十四年、鈴木翠軒先生を顧問に仰ぎ、上野精養軒にて発会式との記録があるようでございますが、たまたま、この夏の頃、私は恩師青山杉雨先生に師事させて頂き、初めて本格的な書道人生にスタートを切った年でございます。私、三十七歳でございました。そして、青山先生から俺は謙慎だが、おまえは太玄に出品しろとの仰せでした。翌三十五年二月、平尾孤往先生を初代会長として第一回太玄会書展が開催、当時の賞としては最下位の秀作賞の札が私の作品に付けられました。が、私自身の作品スタートです。以後一度の欠場もなく、この六十回記念展まで続けられたことは大変幸せと思っております。

六十年、人の場合還暦という言葉が聞きますが、この還暦から飛躍する人の例も多く耳に致します。太玄会もここを契機として更に向上、発展に努力しなければならぬと思っております。

以上でございますので、ここにご来賓の先生方、皆様様、私共の太玄会に引き続き、益々の御声援の程、切にお願い申し上げます。御挨拶に替えさせて頂きます。本日は誠に有難うございました。

# 太玄会所属団体のこの一年の活動（平成29年10月～平成30年9月）

## 書星会

### 第66回書星展

会期 平成30年11月10(土)～11月16日(金)

会場 東京都美術館

代表者 宮 負 丁 香

会期が夏から秋に移り、二回目となった。八月に作品を締切、会前に図録を完成させるスケジュールも定着しつつある。

会期中は、作品解説会や席上揮毫も実施し、会場内は活気に満ちていた。

作品も、上層部の大作やベテランの人生経験が盛り込まれた作品から、若い年代の瑞瑞しい作品まで七百四十点が壁面・台上を演出しバラエティーに富んでいた。

お陰様で三千五百名の方々にお越しいただいた。



## 菅菰会

### 第54回菅菰書展 併催 全国学生展

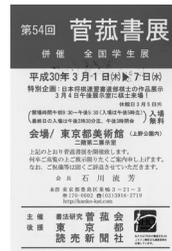
会期 平成30年3月1日(木)～3月7日(水)

会場 東京都美術館

代表者 佐々木 恵 陽

第54回菅菰書展を上野の東京都美術館で開催いたしました（3月1日～7日）。

今年は、学生の一字書、調和体の色紙、又日本将棋連盟書道部によるプロ棋士の作品等新しい企画で来場者の皆様にも親しみやすい書展になったのではないかと思います。出品数も409点と増やすことができました。連日好天にも恵まれ会場也大いに賑わいました。



## 書王社

### 2018 書王社選抜展

会期 平成30年7月18日(水)～7月22日(日)  
会場 アートガーデンかわさき

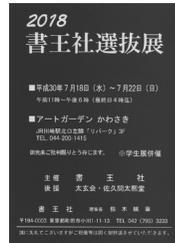
代表者 鈴木 映華

会場がかわって3回目の書展。係担当者や出品者は様子がよく分かるようになり、手際よくスムーズに準備が進められました。出品点数は、故鈴木景堂会長の3点を囲みながら大人は50点、学生は36点でした。書体や作品の大きさ、紙色などにも工夫がみられ、来場者500名以上を迎えての明るい会場でした。猛暑の中を多くの先生方に来場して頂き、心から感謝しております。盛会だったことを嬉しく思いつつ次回を期待して終了しました。

### 書王社条幅研究会

会期 平成30年10月13日(土)  
会場 神奈川県立武道館  
代表者 鈴木 映華

神奈川県立武道館の剣道場にて第6回目の条幅研究会が開催された。課題の「高潔雲入



情」を参加者54名が半切作品に取り組んだ。一人一人に瑛華先生が講評もくんだり、勉強になったとの声が多く聞かれた。

## 研友社

### 第31回研友社展

会期 平成30年10月2日(火)～10月7日(日)

会場 銀座かねまつホール

代表者 田中 鳳柳

毎年、東京銀座画廊美術館で開催してきた研友社展は、31回展の今年から会場を銀座かねまつホールに移し、会員51名の作品を展示した。会場が変わったことで、作品制作に会員個々人の創意工夫がなされ、新たな研友社展として歩み始めることができた。

会場には、田中鳳柳会長が所蔵する中国明清時代の査子標と王文治の小作品2点が展示された。両者とも董其昌に心酔したと言われており、その深淵かつ切れ味の良い作風は衆目の的であった。

末尾となりましたが、太玄会関係者の方々には、多数ご来場頂き誠にありがとうございました。

### 鍊成会

会期 平成30年3月31日(土)  
平成30年7月22日(日)

会場 鷺毛堂鍊成会場

代表者 田中 鳳柳

研友社では、鍊成会を春と夏の2回、浦和の鷺毛堂鍊成会場を借用



して開催しております。春は、研友社が所属している産経国際書展に向けて、夏は、研友社展や太玄会書展に向けての作品指導を中心として実施しています。

錬成会は、初心者の方々が、会長はじめとする幹部の先生から直接指導していただける貴重な機会であり、書道に関する様々な知識・ノウハウを修得できる絶好の機会ですので今後も継続して実施して行く予定です。

### 研修旅行

会期 平成30年11月17日(土)～11月18日(日)

会場 上野～熱海

代表者 田中 鳳 柳

研友社では、毎年秋に研修旅行を実施しております。今年も、書道博物館を見学した後、場所を熱海に移動してMOA美術館を鑑賞したコースでした。

研修旅行となっておりますが、会員相互の親睦を図ることが主目的であり、夜のホテルでは、大いに盛り上がり、今後の書作研鑽に向けたエネルギーを補給することができました。



### 真仙会

#### 第52回真仙会書道展

会期 平成30年6月1日(金)～5日(火)

会場 ながの東急百貨店(長野市)

代表者 小出 聖州

第52回真仙会書道展は6月1日から5日まで長野市のながの東急百貨店5階シエルシエホールで開かれました。出品点数は161点、来場者は2070人。

併せて行われた学童展は262点が出品されました。これにはおじいちゃんやおばあちゃんなど家族全員で来て作品の前で写真を撮る姿もみられました。

祝賀会は3日午後、近くのホテルで行われ131人が出席、作品づくりの苦労話しができました。



作品を見る人たち



表彰される学童の代表者

## 鳥跡会

書研社

第38回書研社展

会期 平成30年3月9日(金)～3月11日(日)

会場 アミコ・シビックセンター・ギャラリー

代表者 中尾 勝子

書研社は故田中双鶴先生が昭和54年に創設され育成された書団体です。毎年1回社中展を行って来ました。

今年は24名の会員が1人2点(原則漢字1点、仮名1点)の作品を展示しました。

双鶴先生の作品や学生の作品も展示し好評を得ました。

鳥跡会合同錬成会

会期 平成30年10月14日(日)

会場 春日会館(徳島市寺町)

代表者 中尾 勝子

鳥跡会は、歌の会、一心会、書研社の三つの団体の合同体です。

年に一度三つの団体が集まって合同の錬成会(太玄会書展に向けて)を行っています。

今年は当初9月30日を予定していましたが台風の襲来で10月14日になりました。



一心会の南先生が漢字を書研社の中尾が仮名作品を添削、批評しながら有意義な一日を過ごしました。

歌の会

第25回記念歌の会書作展

会期 平成30年6月15日(金)～6月17日(日)

会場 徳島県立文学書道館

代表者 弘田 長風

師である春藤大歌先生が2月20日に逝去されました。「大歌先生とともに」をサブタイトルに、第25回記念の歌の会書展を開催しました。会場には大歌先生の作品を数点展示したコーナーを設けました。又、会員全員がうちわに字を書き展示するという新しい試みをしました。



書道研究一心会  
第17回一心会書展

会期 平成30年10月26日(金)～10月28日(日)  
会場 阿波銀プラザ

(徳島市東大工町三丁目16)

代表者 南 溪石

本年度は、第17回の書展を阿波銀プラザで開催いたしました。会員の研修として年に4回の錬成会を組み書展出品作品づくりに取り組みました。

展示概要につきましては、漢字作品を中心に調和体、仮名を加え総数50点となりました。

本年は、会場が新ホール建設中で臨時のホールでの展示となり、少し不安はあったのですが、お陰で天気もよく、沢山の入場者があり無事成功裏に終えることができました。



2018.10.28



2018.10.28



九龍社

第59回九龍社書展

会期 平成30年7月27日(金)～7月29日(日)  
会場 禰陽会館(鯖江市)

代表者 垣内 楊石

ガラス張りの明るい会場に、同人と公募の特選以上の作品448点が展示されました。

全体として、書体や作品の大きさが様々な大作が揃って見応えのある展覧会となりました。個々の作品については、例年と異った様式や書体に挑戦した作品が多く見られ、書作に対する意気込みが感じられました。

学生の部の半紙作品も、日頃の熱心な取り組みが窺われるすばらしい作品が並び、家族連れで訪れ写真を撮る姿が多く見られました。



九龍社宿泊研修

会期 平成30年8月25日(土)～8月26日(日)

会場 越前市しづき温泉湯楽里

代表者 垣内 楊石

年7回の研修会のうちの一行事で、一泊合宿を行いました。

猛暑が続く夏でしたが、少し山あいに入った所で涼しく、快適に練習や作品制作に取り組むことができました。垣内先生の指導を受けたり、皆で筆・紙・墨等について意見交換をしたりしながら研修に励みました。持ち寄った臨書作品の鑑賞会でも、臨書作品の書き方について学ぶことができました。会員どうし親睦も深まり有意義な2日間となりました。



書研社

第42回 書研社展

会期 平成30年9月25日(火)～9月30日(日)

会場 銀座大黒屋ギャラリー

代表者 植木 蒼穹

第42回書研社展は銀座大黒屋ギャラリーにて27名の会員により開

第42回 書研社展

ご鑑賞のうえ、ご好評ありがとうございます。感謝申し上げます。

会期 平成30年9月25日(火)～9月30日(日)  
AM11時～PM6時

会場 大黒屋ギャラリー(〒100-0001 東京都千代田区丸の内2-7-7)

主催 植木 蒼穹

藤井 隆夫	植木 蒼穹	藤井 隆夫	植木 蒼穹
小川 隆夫	植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹
植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹
植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹
植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹
植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹
植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹
植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹
植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹
植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹	植木 蒼穹

書研社  
〒100-0001 東京都千代田区丸の内2-7-7 大黒屋ギャラリー

催、創立者植木九仙の遺墨2点も含め、出品は全紙を最大に半切から小品まで35点。植木蒼穹代表は半切に行草体で三行書。会員の作は九仙流を深めつつ漢字を中心に漢字かな交じり書へと広がりを見せこの一年の成果を発表。臨書は傅山・王鐸・米元章・王羲之・欧陽詢。

多くのご来場を賜わり和やかに交流を重ねることが出来ました。事厚く御礼申し上げます。



昭和の書の先達の作品を鑑賞する研修小旅行

会期 平成30年11月23日(金)

会場 成田山書道美術館

代表者 植木 蒼穹

11月23日、書研社研修小旅行を実施。雲一つない好天に恵まれ、成田山公園の赤や黄色に色づいた木々を眺めながら、成田山書道美術館に到着。当館では、「明治150年の書道」展が開催され、第三期の展示中。大正元年から現書壇まで、美術館所蔵の幅広いジャンルの名品が並び、ゆったりと魅力溢れる代表作を鑑賞。充実の一日となった。



## 高友社

### 第40回記念高友社書展（学生書展併催）

会期 平成30年4月15日(日)～4月19日(木)  
会場 上野の森美術館1階及びギャラリー  
代表者 露野 雅宣

第40回記念  
高友社書展  
(学生書展併催)

ご賞観お待ちしております。

会期 平成30年4月15日(日)～4月19日(木)  
午前10時～午後2時(最終日は2時迄)

会場 上野の森美術館1階  
TEL:3833-4191

主催 高友社  
上野の森美術館  
後援 毎日新聞社

15(日)	16(日)	17(火)	18(水)	19(木)
午前				
午後				

※入場無料  
高友社 事務局(電話)3833-4411  
(連絡先)TEL:3833-4191  
(〒100-0005 東京都千代田区千代田1-1-1)

平成30年は高友社書展が40回記念展、競書誌「鼎心」が11月で500号発行と記念すべき年となった。4月の記念展では会員146名、学生222名の参加を得、例年にも増して力を注いだ作品群が会場を飾った。またギャラリー室では「臨書による中国、日本の書道史」と「ワークショップ―墨の華を咲かそう―」の企画も実施した。お陰様でいづれも好評をいただき、盛況裏に終えることができた。



## 第10回高友社合宿

会期 平成30年8月26日(日)～8月27日(月)  
会場 ニューウェルシティ湯河原  
代表者 露野 雅宣

高友社では錬成会を年4回、一泊の湯河原合宿を1回実施している。特に合宿は幹部先生方の指導を直接受けたり、会員相互で意見交換したり、何より日常を離れた環境で書に集中できる貴重な場となっている。今年も初日は太玄会書展、高友社書展、毎日展、そして昇段試験など各自の課題に取り組み、2日目は全員で「乙瑛碑」の臨書と做書を体験し、良い研鑽と親睦の機会となった。

## 鼎墨会

### 平成30年秋期合宿錬成会

会期 平成30年10月26日(金)  
10月28日(日)  
会場 山梨県 秩父民宿山里  
代表者 遠藤 有翠

鼎墨会は春期と秋期年に2回の錬成会を河口湖に於て長年行つて来ましたが、御多分にもれず高齢化に依る閉鎖となつてしまいました。常宿が無くなり急遽会場を秩父武甲山の麓にある民宿に移す事に、会場の周辺は人里離れた閑静な場所で錬成に



## 青龍会

は最適です。錬成の三日間、先生のアドバイスや仲間同士の意見のやりとり等、熱の入った書き込みに終始して終了しました。

### 第48回青龍書展（学生書展併催）

会期 平成30年4月7日(土)

4月9日(月)

会場 すみだりパーサイドギャラリー

（墨田区役所1階）

代表者 下谷 蕪雪



4月の緑豊かな季節に48回青龍書展を開催致しました。

三日間の開催とはいえ準備は大変でしたが、二日目の学生・一般の授賞式には予定会場には入りきれない程の多勢の親子が参加して、盛



会裏に終了しました。来年に向けて意欲満々の子供達に背中を押されている一般の受賞者もいた様です。  
又、ご来場いただきました先生からは励ましのお言葉を戴き、心より御礼申し上げます。

## 療原社

### 第54回現代書道教育連盟展

会期 平成30年9月8日(土)～9月9日(日)

会場 シアター1010ギャラリー

（北千住丸井11階）

代表者 堀越 壽嵩



「春夏秋冬」をテーマに、それぞれが創意工夫を行い、作品づくりに取り組みました。

作品の大きさも、表装も、使用する紙の色もそれぞれが自由に考えて作品にするというやり方は、故佐渡壽峰前会長の意を受け継いでいます。

元号が変わる今年開催の55回展は、「療原社書展」と名称を変えますが、前会長から続く伝統を受け継ぎながら、新たな時代を築いていく決意で臨んでまいります。



平成31年度太玄会所属団体の活動予定

団体名		代表者		活動内容		開催日時		会場	
燎原社	堀越壽嵩	第55回現代書道教育連盟展	8月31日(土)～9月1日(日)	シアター11010ギャラリー (北千住丸井11階)	青龍会	下谷 蕪雪	第49回青龍書展 学生書展併催	4月27日(土)～4月29日(月)	すみだリバーサイドホールギャラリー (墨田区役所1階)
鼎墨会	遠藤有翠	未定	未定	未定	高友社	落野雅宣	第10回高友社合宿 学生書展併催	8月25日(日)～26日(月)	ニューウエルシテイ湯河原
書研社	植木蒼穹	第43回書研社展	9月24日(火)～9月29日(日)	大黒屋ギャラリー	九龍社	垣内楊石	第60回九龍社書展 九龍社宿泊研修会	未定	未定
鳥跡会	中尾勝子	鳥跡会合同錬成会	未定	未定	南	南 溪石	未定	未定	未定
	弘田長風	第26回歌の会書作展	6月14日(金)～6月16日(日)	徳島県立文学書道館		中尾勝子	第39回書研社展	3月22日(金)～3月24日(日)	徳島市アミコシビックセンター 3Fギャラリー
真仙会	小出聖州	未定	未定	未定	研友社	田中鳳柳	未定	未定	未定
書王社	鈴木映華	2019書王社選抜展	7月17日(水)～7月21日(日)	アートガーデンかわさき	菅菰会	石川流芳	第55回菅菰書展 併催全国学生展	3月1日(金)～3月7日(木)	東京都美術館
書星会	宮負丁香	第67回書星展	11月10日(日)～11月16日(土)	東京都美術館	書星会	宮負丁香	未定	未定	未定

## 特集

# 古典への思い 「法帖と私」



書星会 高山爽快

幼、小と書塾に通い、中学でも部活で書道が続けてきた私は高校の芸術教科で当然のように書道を選択した。教科書で「建中告身帖」の一部に出会った。たくましく暖かみのあるこんな書が書けるようになるのだったら書道が続けたいと思ひ大学へと進路を決めた。和歌山から新幹線で上京したが、受験日当日の朝父の訃報があり、受験しないで帰った。自分の人生をいきなりもぎとられたような気がした。これが運命というなら運命なんかには負けなかと独学を始めた。

高校で学んだことは入門篇で一通り流しただけ。図書館の書道コーナーで手にする本には知らないことばかり、本を借りてはノートにまとめ、歴史を知ろうとした。文部省（現在、文部科学省）認定書道・ペン字検定にも挑戦した。結婚、三子誕生、子育てをしていると中途で終わっていた書道を再びやりたいという思いがでてきた。独学に限

界を感じていたので、まず通信教育のスクーリングに参加した。通信教育で書道が続けると縁があつて、喜舟先生がつくられ、錦龍先生が継がれた「玄門会」に導かれた。喜舟先生にはお会いしたことはなかつたが、書籍等で先生の言葉に感銘を受け、今でも心に深く刻まれている。「玄門会」では、新たに錦龍先生、宮負先生お二人の師匠に恵まれた。錦龍先生の楷書にひかれ、「張孟龍碑」を学び始めた。そのうち、行書を学ぶ必要を覚え、法帖に取り組んだ。法帖は人に決めてもらうものではなく、自分で決めるようにと宮負先生から指導を



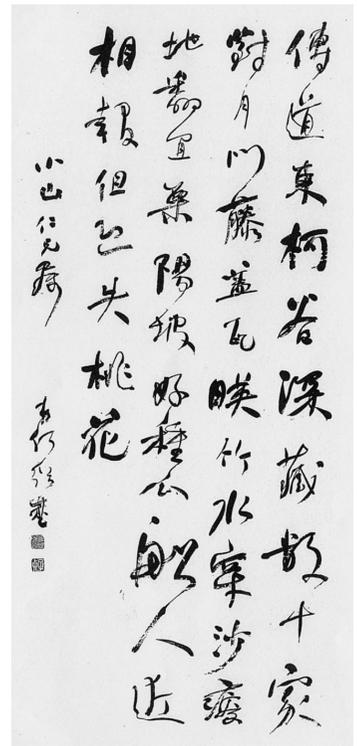
受けた。色々な法帖の中から「何紹基」を選んで臨書していった。先生から「何故これを選んだのか？」と問われたので、何紹基の書が好きだからと伝えた。すると、この書は、長峰で歳をとってすいも甘いもかみしめた人が書くものだと言えど、黄庭堅、蘇軾、傅山と次々に臨書し、争座位稿を持っていったらやっとOKがでた。

高校で出会った「建中告身帖」を何故臨書の課題としないのかと自分で不思議に思ったことがあった。私にとって「建中告身帖」はながめているだけで満足な存在であり、自分で書こうとすると違ったものになってしまう様な気がして踏み込めなかった。そんな私が次に魅力を感じたのが「書星」に載っていた全く違う表現の「錦龍先生の張孟龍碑」だった。

目ならいも大事と現代書道二十人展、日展、読売展、毎日展等を見に行つた。色々な書に触れ、共通するものは何か？どの書風にも共通する時代に左右されないよい書って何だろう？普遍的な書って？などといういろいろと疑問（課題）がでてきた。その答えは、法帖の中にあるのではないかと思つた。

偶然にも二〇〇二年書友と共に展覧会を見学する為上海に行くことになった。上海博物館で開催された晋唐宋元书画国宝展が目的だった。現地の書籍店でいろいろな法帖をみて、やっぱり何紹基に魅力を感じた。私が書きたいのはこの字なのだ。

次の玄門会で何紹基を臨書し、持って行くとOKが出た。やつた！前に書きたいと言つてから十年の月日が流れていた。又、二〇一一年、太玄会主催の台北旅行にも参加させていだいた。「何創時書法藝術基金會」で息がかからないようマスクを付け間近で見学した傅山、董其昌、王鐸など、せまってくるような迫力で圧巻だった。ずっと見て



いたい、浸っていたい……。直筆を見る大切さが言葉でなく五感で分かった体験だった。又、故宮博物館では何紹基行書作品を見ることができ、やっぱり何紹基はスゴイと改めて感動した。

何紹基の臨書を始めてから十六年、最初は何紹基のキラキラした細線、独特な懐の広いところなどにひかれ形臨中心だった。新しいことに気がついた時や書けない時など一喜一憂した。少しは似てきたかなと思つていたが、日記を臨書し始めると全然似ていないことに気が付いた。長い年月をかけ特徴的な形ばかりを見て、私はいったい何を学んできたのだろうかと思う。

喜舟先生の言葉に「ものを見るにも・考えるにも・常に自分の今の高さにおいてだけしか見られない。その在り方、その事実として見ることになる。よく認識し、より高い所から見ることが大切」とあります。

今をスタート地点とし、じつくりと法帖に取り組んでいきたいと思つています。

今後ともよろしく願ひします。

## 恩師に感謝



真仙会 清水 美代子

この度第59回太玄会書展におきまして大変身に余る賞を賜り、審査にあたられました諸先生に心より御礼申し上げます。

小学生の頃から「毛筆」が大好きで、高校生の時は書道部に在籍し、ほとんど毎日部室に通い仲間との楽しい会話・稽古の日々でありました。高三になり好きな書道をもっと深く学びたいと考え、教員免許状取得ができる実践女子大学に進学し、教育大（現筑波大学）大学院を修了された間もない今は、亡き田中東竹先生にご指導いただくことができました。

書の基本は古典学習にありとされ、臨書中心の学習を授業、書道部に厳しく、楽しく四年間今は感謝あるのみです。先生は大変ユーモアに溢れ、常に笑顔で優しいお兄様の存在でもいらっしやいました。

在学中「かな」に魅力を感じ、かなの優雅典雅、流れる文字の線に含まれる高い格調に心惹かれ、この道を深く学ぶ端緒となりました。

その後縁あって奈良青丹会吉川美恵子先生のご指導をいただき、今に至っております。

人様の繋がりとは不思議なもので、東竹先生と吉川美恵子先生は同じ干支。「玄武展」で一緒されるようになり、東竹先生は「あんな美人

な方には、もっと早く入会してもらいたかった!!」「あの先生はこれからもっともっと大きく花開いてゆかれる…、しっかりと勉強しなさいよ!!」とお会いする度に叱咤激励して下さいました。

吉川美恵子先生もやはり古典学習の必要性を強調され、古典をもとにそこにこめた時代の香り豊かな作品を目ざすことの大切さを常のべられます。

これからは心新たに利休の道歌を胸にとめ

◎その道に入らんと思ふ心こそ我身ながらの師匠なりける  
◎稽古とは一より習ひ十を知り十よりかへるもとのその一日々地道にコツコツ古筆研究を重ね、書に浸れる時間を持つことができることに深く感謝し、自己の人間性向上に努め精進してまいりたいと思います。

今後更なるご指導を賜ります様お願い申し上げます。



2016/01/05

# 文字は残るもの



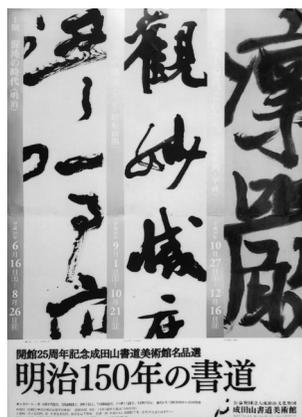
研友社 須田 瑞 兆

小学五年生の時、児童会の書記に選ばれました。先生が「君が書いたものは、記録として、ずっと学校に残るのだよ」と。「残る」その言葉に自分の頭の中が一瞬止まったのを覚えています。

当時はハンドルを回して削る新品の手動式鉛筆削りに感動していたおかつば頭の五年生。鉛筆を持って書くことは漢字書き取りの宿題や、連絡帳に板書を書き写すことが日常でした。自分の書いた文字が残るといふ事など、まったく考えにおよばないことでした。「文字は残るのだ」と反復しながら下校、帰宅して「大変だ！習字を習いたい」と母に伝えたのです。

自分から何かが欲しいとか、食べたいなど言ったことのない娘に驚き、母は直ぐに近所の書道教室へ連れて行ってくれました。その日のことは今でもよく覚えています。

高校生の時の選択科目は書道、教科書は今では黄ばんでしまっていますが宝物です。十一月、成田山書道美術館で開催されていた「明治150年の書道」正面会場に展示されていた赤羽雲庭の「凜厳」は展のポスター写真にもなっていました。墨色と共にその躍動感と力強さ



います。

一時を越えて真蹟を観ることができました。このような機会を得て、懐かしさと共に謎が解けたような不思議な思いでした。

今日ではスマートフォンの時代となりましたが、パソコンを覚えはじめた頃、幼友達にプリントした手紙を出しました。その返事には「短くても良いから私には手書きのものがほしい。貴女の文字から、今は忙しいのだろう、今日は元気そう等々をうかがえるから」とありました。友の小さな訴えに大事なことを忘れかけていたようです。文字は伝えるものもありました。

「書は残るもの、伝えるもの」立派な書は残せないけれど、今は心して丁寧な時間を過ごしたいと思っています。



に圧倒されました。雄々しい「凜厳」は大事にしている五十年前の教科書に載っていたのです。「漢字の鑑賞作品の研究」のページなのですが、高校の授業の中では全く理解できていなかったと思

## 書を観ていて思うこと

書人社 大 森 鳳 城

四十年ほど前のことになるが私はある会で勉強していた頃、三年間のコースを終えて改めて書の先生を探していた。その為、一月に二回ほど土曜日は展覧会へ行つて作品を見て歩いた。いま思えば作品を見て考えるなど難しい事なのだか長く見て、見慣れれば少しは解るだろうと思つた。

数多くの展覧会があり、多様な書作品があつた。わたしは書は読めなくてはいけない、自然にあるがままで美しい書であり、それが作品として成立していなければならぬと思つていた、非常に難しいことだが。また、書を教えることを考えていたので、その為、教育的な書道で、伝統書を学びたいという目標を持っていた。その頃、展覧会では墨だけでは無くカラフルなものがあつたし、立体書道なるものがあったり、篆刻の他に刻字があつたり、光による書道など非常に賑やかな世界であつた。漢字は石鼓文から、また、明・清までの古典の法帖の展覧会にもよく行った。

仮名は高野切や三色紙など上野にある国立博物館で。国立博物館の東洋館はいつも明代や清代の作品が並べられている。国交回復の年に初めての中国へ行つてから、拓本もよく見たが、拓本には丁寧な採られたものと、粗雑なものがある。同じ碑から採られたものでも時代

によつても、碑の状態によつても大差がある。中国の情況もたいへん変わつてきた。だいぶ以前から、碑などは直接に彫つた面がみられず拓本を碑との間に挟んでガラス越しに見ることになった。私は書く側よりも観る側として考えがちだが、書を見ること、楽しむ事には深い見識が必要である。より観ることに沿つた環境であつて欲しい。

## 編集後記

はじめにこのたびは、第75号の発行が遅くなり大変ご迷惑をおかけいたしました。心よりお詫びを申し上げます。今後はこのようなことがないよう十分配慮し、編集に努めて参る所存です。

さて、今年は創立60周年記念事業として、第60回記念太玄会書展、創立60周年記念祝賀会を無事開催することができました。展覧会では多くの方々にご来場を賜り、特別講演では大東文化大学教授の高橋利郎先生による演題「幕末文人趣味から現代の書へ」による講話を頂きました。また記念祝賀会では62名ものご来賓のご列席を賜り、300人を超える会員も参加する中、太玄会の現在の姿、そして次の時代に向けた抱負をご理解いただく機会となりました。巻頭の垣内楊石会長のあいさつ文にもありますが、太玄会は昭和三十五年に結成し、その後いくつもの曲折を経て現在に至っています。これまでを振り返ると、この六十年間は結成当時の理念を人から人へ繋いできた歴史と言えます。今回の式典では、多くの皆様がその歴史の重みを噛みしめられた事と存じます。また、このことは発足当初から運営に当たられてこられた本会運営委員の先生方の功績あつての現在であり、私たちの書道人生がすなわち太玄会の歴史とも言えます。今後も書と向き合い、自分と向き合う中、お互いが切磋琢磨し合いながら繋がり続ける会になることが、発足当初の理念であると考えます。

次の時代でも太玄会がさらに発展することを祈念し編集後記とさせていただきます。

令和元年8月

広報部長 荒井湧山

令和元年八月発行

太玄会会報 第75号

発行者 太 玄 会

編集者 太玄会事務局広報部

制作 (株)風雅プランニング